

西宮市所在

# 高畠町遺跡（II）

—西宮待機宿舎新築工事に伴う発掘調査報告書—

1999年3月

兵庫県教育委員会

西宮市所在

たか はた ちょう い せき  
**高畠町遺跡（II）**

- 西宮待機宿舎新築工事に伴う発掘調査報告書 -



1999年3月

兵庫県教育委員会

## 例　言

1. 本書は、兵庫県西宮市高畠町20-13他に所在する「高畠町遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査並びに整理作業は、兵庫県警察本部の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成8年度に実施した。確認調査は兵庫県教育委員会の山田清朗、全面調査は京都府からの支援職員である石崎善久と兵庫県教育委員会の柏原正民が担当した。全面調査では、立建設株式会社に作業委託を、また株式会社かんこうに空中写真測量委託をそれぞれ行った。
4. 調査現場での遺構実測・写真撮影は、各調査員がそれぞれ担当した。また全面調査では、次の諸氏が調査補助員として参加した。

坂東伊吹・佐竹美紀・西田悠生・尾田　孝・藤井紗綾香・望月亜希子
5. 整理作業は平成10年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。遺物写真は（株）三宮写真館に撮影を委託した。
6. 本書に使用した方位は、国土座標V系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。また方位は座標北を指す。
7. 本書で使用する遺構名は、アルファベットによる略号で表記する。略号の意は以下による。

S A : 棚列	S B : 掘立柱建物	S D : 溝	S E : 井戸	S H : 積穴住居
S K : 土坑	S P : ピット			
8. 本書に掲載した図版のうち、遺跡分布図には、国土地理院発行2万5千分の1地形図「西宮」図編を使用した。個別遺構図については、空中写真測量による成果ならびに現地で調査担当者が実測した図面を基に作成した。

遺構の断面は基本的に長軸と直交する最大幅を図化したが、遺存状況等により変更したものがある。また、柱穴が明らかなものについては、最大幅の断面図に奥側の断面形を合成して図化した。
9. 本書の作成は柏原正民が担当した。編集は、古谷章子の補助を得て柏原が実施した。
10. 本報告にかかる出土遺物ならびに記録写真、関係書類は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および兵庫県教育委員会魚住分館において保管している。

## 本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経過	(1)
第2節 調査の経過	(1)
第3節 整理作業の経過	(2)
第2章 位置と環境	
第1節 遺跡の立地	(3)
第2節 周辺の遺跡	(3)
第3章 調査成果－遺構	
第1節 遺構の概要	(6)
第2節 検出遺構	(6)
第4章 調査成果－出土遺物	
第1節 土器	(13)
第2節 その他の遺物	(16)
第5章まとめ	(20)

## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡	(4)
第2図 出土遺物実測図(1) SX 0.2 出土土器	(14)
第3図 出土遺物実測図(2) 石製品	(16)
第4図 出土遺物実測図(3) 鉄製品	(16)

## 表目次

第1表 出土土器観察表(1)	(17)
第2表 出土土器観察表(2)	(18)
第3表 出土土器観察表(3)	(19)
第4表 検出溝一覧表	(19)

## 図版目次

図版1 第1遺構面全体図	
--------------	--

- 図版2 第2遺構面全体図
- 図版3 遺構平面図 SH01・SH02
- 図版4 遺構平面図 SH03・SH04・SH10
- 図版5 遺構平面図 SH05・SH12
- 図版6 遺構平面図 SH06・SH15
- 図版7 遺構平面図 SH07・SH09・SH14
- 図版8 遺構平面図 SH08・SX01
- 図版9 遺構平面図 SX02
- 図版10 遺構平面図 SB01・SB04
- 図版11 遺構平面図 SB02・SB03
- 図版12 遺構平面図 SE01・SP139
- 図版13 出土遺物実測図(4)
- 図版14 出土遺物実測図(5)
- 図版15 山土遺物実測図(6)
- 図版16 山土遺物実測図(7)
- 図版17 出土遺物実測図(8)

## 写真図版

- 写真図版1 上: 第1遺構面西部全景 中: SH03・10 下: SH05
- 写真図版2 上: SH04・05・06 中: 手持勾玉出土状況 下: SH12
- 写真図版3 上: SH14 中: SH15 下: 作業風景
- 写真図版4 上・中・下: SD09
- 写真図版5 上: SX01 中・下: SX02
- 写真図版6 上: 第2遺構面全景 中: SB01・02・03 下: SE01
- 写真図版7 山土遺物① 土師器
- 写真図版8 出土遺物② 土師器
- 写真図版9 出土遺物③ 土師器
- 写真図版10 出土遺物④ 土師器
- 写真図版11 出土遺物⑤ 須恵器
- 写真図版12 出土遺物⑥ 須恵器
- 写真図版13 出土遺物⑦ 土器
- 写真図版14 出土遺物⑧ 土器
- 写真図版15 出土遺物⑨ 土器
- 写真図版16 出土遺物⑩ 土器
- 写真図版17 出土遺物⑪ 石製品・鉄製品・土器

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経過

### 1. 復興取扱いの経過

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災で、西宮市では死者1,126人・南部を中心に全壊家屋20,667棟（平成9年12月22日現在）を数える大きな被害をうけた。

地震の被害に対する復興計画が打ち出される一方で、被災地に存在する埋蔵文化財の取扱いもまた、地震発生当初からの課題として浮かび上がった。市民生活の復旧に直接関わる事業について、文化庁は緊急性を重くみて「平成7年5月末日までの期間、文化財保護法による届け出などを要しない」対応をとると発表した。また長期の対応が必要な復興事業については「被災地の置かれた状況に鑑み、早急な復興が急務であるとの認識を基本とし、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の保護の整合を図るものとする」という基本方針を打ち出した。具体的な適用に際しては、兵庫県と災害救助法が適応された10市10町および関係機関による協議を重ね、取扱細目を決定して取扱うことになった。

### 2. 当該事業の概要と埋蔵文化財取扱いの経過

阪急西宮北口駅を中心とする一帯は、多数の住居ならびに商業施設が建ち並ぶ地区として、西宮市街の中核を形成している。しかし市街の拡大によって、都市機能の効率性には限界が生じてきたことも事実である。

市街のさらなる活性化を目的として、この地域一帯における土地区画整理事業が計画された。駅の南側にあたる西宮市高松町・両度町・芦原町周辺は、西宮北口南地区土地区画整理事業の対象として、平成5年1月の事業計画決定以後、事業が進められることとなった。兵庫県警察本部の西宮待機宿舎は、西宮市高松町に存在したが、事業の具体化に伴って西宮市高畠町20-13他に移転することが決まった。

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、西宮北口駅周辺も被害が集中し、震災からの復旧・復興事業が最優先となった。このような状況のもと、平成8年度には「西宮市震災復興計画」がまとめられ、西宮北口南地区土地区画整理事業の潤滑な推進が改めて明確化された。また、これによって待機宿舎の早急な移転が諸方面から要望された。

事業の具体化が進むなか、移転先における埋蔵文化財の取扱いをめぐって、兵庫県警察本部と兵庫県教育委員会で協議が行われた。高畠町は早い段階で市街化したことから、埋蔵文化財の存在について十分把握している状況になかった。このため事業の円滑な推進を図るために、確認調査を実施して埋蔵文化財の状況を把握することで合意をみた。

## 第2節 調査の経過

### 1. 確認調査 平成8年5月21日（遺跡調査番号：960101）

兵庫県警察本部からの依頼に基づいて、事業地内における埋蔵文化財の状況を把握する調査を実施した。 $2 \times 4$ mの試掘坑を事業地内に3カ所設定し、遺物の存在や堆積状況を調査した結果、すべての試掘坑から遺物ならびに遺構を認めた。これによって、事業地内の全面に埋蔵文化財が存在することが明らかとなった。

### 《調査体制》 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

所長 青木正之 副所長（復興調査第2班長兼務） 大村敬通

・調整事務 企画調整班 主任調査専門員 輔老拓治 技術職員 鈴木敬二

・調査担当 調査第3班 主任 山田清朝

### 2. 全面調査 平成8年7月8日～9月6日（遺跡調査番号：960141）

埋蔵文化財の存在が確認された調査結果を受けて、事業者と対応を協議した。西宮北口駅南地区土地区画整理事業との密接な関連から、当事業における埋蔵文化財の取扱いについては、震災復興事業の「適用要領」に基づいて対応することとし、復興調査班が調査を担当した。

全面調査の対象は、地下への掘削で直接影響のおよぶ範囲・深度に限定し、建物の建設範囲にあたる768m<sup>2</sup>・掘削深度2.5mを対象に、全面調査を実施した。

調査は、調査対象から除外可能な上層の堆積（造成に伴う盛土等）を重機で除去した。以下の遺物包含層については、人力によって掘削した。遺構面に到達した段階で、上面の精査を行ない遺構の検出を行った。調査の過程で、新たに下層で遺構面の存在することが明らかになったため、合計2つの遺構面を対象に調査を進めた。

この間、適時、実測・写真撮影を実施して、状況の記録につとめた。またそれぞれの遺構掘削が完了した段階で、空中写真測量を実施して、調査区全景の写真撮影・図化を行った。

### 《調査体制》 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

所長 青木正之 副所長（復興調査第2班長兼務） 大村敬通

・調整事務 企画調整班 主任調査専門員 輔老拓治 主査 種定淳介

・調査担当 復興調査第1班 技術職員 石崎善久（京都府教育委員会からの支援職員）

復興調査第2班 技術職員 柏原正民

### 第3節 整理作業の経過

整理作業は、出土遺物の一部を全面調査に並行して洗浄し、以降の工程（洗浄・注記・実測・整図・編集等）についても埋蔵文化財調査事務所で実施した。

### 《調査体制》 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

所長 寺内幸治

・整理担当

整理普及班 調査専門員 国崎正雄 主査 森内秀造 技術職員 長濱誠司

企画調整班 技術職員 柏原正民

嘱託員 古谷章子・八木和子・宮田麻子・小山みゆき・本庄田英子・石野照代・茨木恵美子

・飯田章子・鈴木まき子・横山キクエ・竹内泰子・荻原聰美・岸野奈津子・岡田美穂

・山口幸恵・真子ふさ恵・宮野正子・綾小路公子・川村由紀・前田恭子

## 第2章 位置と環境

### 第1節 遺跡の立地

西宮市は、人口405,514人・面積99.13km<sup>2</sup>（平成10年7月1日現在）を数える阪神地方西部の中核都市である。東西約13km・南北約18kmを測る細長い市域の中央から北部にかけては、六甲山地の東部にあたり標高400～500m級の秀ヶ辻山、畠山などが横たわる。

現市街を形成する南部は夙川・武庫川によって形成された沖積平野である。国道43号線から海岸部にかけては漁業・酒造業を背景に、近世より市街地が発達した。現在は酒造業を中心に各種工場が林立する。国道43号線以北は水田地であったが、近代以降鉄道の敷設等に伴って宅地化が進んだ。現在では住宅地のはか卸小売業・サービス業などが発達している。

高畠町は西宮市の南東部にあたる。南はJR東海道本線、東は今津川を境とし、北西部を名神高速道路がかかる。町内は大半を工場とグランドが占め、南西部に若干のマンションや民家がある。もとは深津池という溜め池と田園だったが、昭和30年代後半から工場が進出。また西宮球場に本拠地を置くプロ野球チーム・阪急ブレーブスの関連施設などが設置されたが、本拠地の移転に伴って施設の整理・統合が進められた。震災の直後には、被災者の仮設住宅が設置された。

阪神・淡路大震災を経て高畠町一帯は、住宅ゾーンとして生まれ変わろうとしている。工場とグランドの跡地には高層集合住宅の建設が進み、近未来的な住宅地の景観への変貌がはじまっている。

### 第2節 周辺の遺跡

西宮市域の南部において現在知られている遺跡の多くは、六甲山南麓の丘陵から扇状地に立地している。ここでは高畠町遺跡の周辺に存在する遺跡の状況について触れる。

阪神地方－特に大阪湾に面した南部－では、若干の旧石器の出土が知られるものの、遺跡として把握される最古の足跡は縄文時代早期に該当する。山芦屋遺跡（芦屋市）をはじめ、六甲山地南麓の丘陵部に出現したこれらの集落は、後期にかけて次第に平野部にまで拡がりを見せる。弥生時代に入ると沖積地の開発が本格化し、自然堤防上に大規模な集落が出現する。猪名川右岸の田能遺跡（尼崎市）をはじめ、猪名野平野のあちこちにも、そうしたムラの存在を示す遺跡が確認されている。

西宮市域では、縄文時代にまでさかのぼる遺跡・遺物は知られていない。弥生時代前期新段階の土器が出土した甲風園遺跡（7）・越水山遺跡（5）などから、当該時期の遺物が出土している。しかし、当時の状況を考えるに十分な資料は少なく、今後の調査に期待する点が多い。

調査成果が蓄積されているのは弥生時代中期以降で、市内の各地において遺跡が確認されている。西宮市域における弥生時代中期の遺跡は、六甲山南麓の丘陵地に分布し、特に市の中部を東西に流れる仁川の中流域、および市街地の背後にあたる上ヶ原台地に顕著な集中を見せる。仁川高台遺跡・仁川五ヶ山遺跡・上ヶ原新田墓地遺跡などはいずれも標高100～150m付近に立地することから、六甲山地の全面に展開した高地性集落として性格が注目される。また上ヶ原台地の縁辺に立地する越水山遺跡（5）も、同時期にひとつの盛期を迎えており、関連した動向が注目される。

弥生時代後期に入って遺跡数は一層の増加を見せ、沖積平野にまで拡がるようになる。JR甲子園口駅南西に存在する甲子園口遺跡や西宮神社社頭遺跡（10）などでは、同時期の遺物がまとまって出土して



- |               |               |              |              |
|---------------|---------------|--------------|--------------|
| 1. 高畠遺跡       | 6. 広田神社No.3地点 | 11. 津門東芝遺跡   | 16. 津門大蔵町遺跡  |
| 2. 広田神社No.1地点 | 7. 甲風園遺跡      | 12. 大塚山古墳    | 17. 石村町銅錢出土地 |
| 3. 具足塚古墳      | 8. 北口町遺跡      | 13. 津門稻荷山古墳  | 18. 上鳴尾遺跡    |
| 4. 広田神社No.2地点 | 9. 神楽町遺跡      | 14. 津門稻荷山遺跡  |              |
| 5. 越水山遺跡・越水城跡 | 10. 西宮神社社頭遺跡  | 15. 津門稻荷町9遺跡 |              |

第1図　周辺の遺跡

いる。また、弥生時代後期の遺物として注目されるものに、津門大塚町(11)で出土した扁平紐式六区製鋳物の銅鐸がある。第二次世界大戦の戦火によって炎われ現存しないが、次の古墳時代との関連を考える上で貴重な資料である。

古墳時代を迎える猪名野平野にもあちこちに大型の前方後円墳が築かれるようになる。しかし大きな墳丘は、後世一特に近代以降における積極的な開発の対象となった。今にその姿をとどめる阪神間の古墳は、ほとんどが消滅または著しい改変を受けている。西宮市内の大塚古墳として、現在の国道2号線建設によって消滅した津門稻荷山古墳(13)や、現アサヒビール西宮工場の構内に存在したとされる大塚山古墳(12)が断片的な資料から存在を知られている。しかし古墳時代の前・中期については、空白感

が否めない。

後期に入ると、六甲山地の南斜面には、横穴式石室を主体とする古墳が数多く造られた。上ヶ原から仁川にかけての丘陵部にも同様の古墳は多数存在したが、宅地造成などで大半が消滅している。上ヶ原古墳群・仁川高台古墳群・八十塚古墳群などは、現在では1～数基が遺存するにすぎない。しかし上ヶ原台地から大きく張り出す丘陵の縁辺部にも、具足塚古墳(3)や天神裏古墳などが存在しており、本来の分布はかなりの広範囲であった可能性を示唆している。

古墳時代の集落遺跡としては、越水山遺跡(5)や甲子園口遺跡などが中～後期の集落として知られる。このほか、広田遺跡№1地点(2)・№2地点(4)で、古墳時代の遺物が出土している。

莊園の発達と前後して、広田社・戎社（現在の西宮神社）の繁栄や港湾の発達が、西宮に都市としての成長を促進させた。奈良・平安時代の顯著な遺跡は知られていないが、中世以降、文献をにぎわせた活気な動きが遺跡からも見てとれるようになる。西宮神社社頭遺跡(10)では、当時の繁栄ぶりを思われる中世から近世にかけての遺物が多く出土する。石在町(17)の国道43号線歩道下から出土した埋納銭は、中世に流通していた貨幣の実態のみならず、西宮の繁栄を裏付ける資料として興味深い。海岸沿いでは、上鳴尾遺跡(18)などの存在から、海と密接にかかわる集落も姿を垣間見ることができる。

近世に入っても西宮神社の信仰は衰えず、周辺の集落もさらなる発展をとげた。中世以来の港湾や商業に加え、酒造業・大阪湾における漁業の拠点として、近世都市「西宮驛」を形成するに至る当時の動向は、現在の市街形成の礎となった。

西宮市は阪神間の郊外都市として、明治以降には積極的な市街化が進められた。その影響から、特に市街地域における埋蔵文化財の状況については十分把握できない状況にある。しかし近年、文化財保護の法令整備によって、埋もれた埋蔵文化財の状況を知る成果が蓄積されつつある。

特に阪神・淡路大震災以後、復興事業に伴う埋蔵文化財調査によって、これまで状況がわからなかった市街－特に沖積平野部－において、遺跡の存在が確認されつつある。今回報告する高畠町遺跡のほか、北口町遺跡(8)・神楽町遺跡(9)・津門人簡町遺跡(16)などはこうした調査の結果、明らかになつたものであり、これまで漠然と捉えられてきた西宮市域の平野部における遺跡の分布が、今後注目されるであろう。

## 第3章 調査成果－遺構

### 第1節 遺構の概要

#### 1. 調査区の堆積状況と遺構面・包含層の層序関係

今回の調査では、震災復興の取扱いに準拠して①建物の建設範囲 ②基礎建設の掘削が直接及ぶ深度に調査対象を限定した。このため、調査区外に延びる遺構や、掘削深度以下に存在する遺構・遺物については、今回の調査対象から除外している。

調査対象である現地表下2.5mの掘削深度内で、2枚の遺構面と2つの遺物包含層を確認した。調査区内での堆積状況は、まず現地表面から約1.5～2mの範囲まで盛土層が堆積する。調査前に存在した阪急西宮第2球場の造成によるものである。続いて旧耕作土・遺物包含層・遺構検出面の層序をなす。盛土と旧耕作土は重機等を用いて除去し、現地表面下1.5m前後から調査に伴う掘削を開始した。

遺物包含層・遺構面は2つずつ確認した。本報告では、下層から順に番号をふり、各調査対象の呼称としている。上層から堆積順に、第2包含層→第2遺構面→第1包含層→第1遺構面とする。

#### 2. 遺構面・包含層の状況

番号とは逆になるが、上層から順に遺構面・包含層について概要を述べる。

**第2包含層**：旧耕作土の直下から第2遺構面の上面を覆う。30～40cm前後の堆積厚を測る。出土遺物は瓦器・土師器などが中心で、数は少ないが綠釉陶器などの存在が注目される。陶磁器はごく少量が出土したのみで、含まれる遺物は13～14世紀のものが大半を占める。

**第2遺構面**：現地表下1.8～2mで検出した。中央には西宮第2球場のクラブハウスによる基礎痕が方形に残り、調査区を分断する。検出面はほぼ平坦だが、東側の遺構は大半が上面を削平されている。遺構面は本来、東から西へ緩やかに傾斜していた可能性がある。

検出した遺構は、掘立柱建物・井戸・溝・土器棺墓・土坑・ピットなどがある。大半は中世の遺構と考えられるが、土器棺墓(SX02)は7世紀代の上師器蓋を用いている。

**第1包含層**：2枚の遺構面の中間に位置する。粒径の粗い砂層で、30cm前後の堆積厚を測る。含まれる遺物は古墳時代後期の須恵器がもっとも多い。また遺物量は少ないが、7～8世紀の特徴を持つ上器片や風字甕、布目痕のある瓦片なども含まれている。

**第1遺構面**：現地表下2.0～2.3mで検出した。堅穴住居址・溝・土坑・ピットなどがある。弥生時代末～古墳時代初頭および古墳時代後期の遺構を、同一面で検出している。

弥生時代末～古墳時代初頭の遺構には、遺存状況のよい土師器が多く出土した溝(SD09)や、土坑(SX01)などがある。また古墳時代後期の堅穴住居址は、調査区の中央部付近に密集し、複雑な切り合いを有する。遺構の検出面は内から東へ、シルト→砂層(河川堆積砂)へと変化する。調査地の東部には旧河道があり、その堆積上に集落が形成されたと考える。以下の堆積については、可能な深度まで部分的に断ち割って状況を確認したが、遺構ならびに遺物の存在は見られなかった。

### 第2節 検出遺構

#### 1. 壚穴住居址

15棟を確認した。すべて第1遺構面において検出し、調査区の西部に顕著な集中を認める。弥生時代

末～古墳時代初頭と古墳時代後期に大別され、前者は円形・後者は方形の平面を有する。円形住居址は、いざれも一部が調査区外へ続くため、全容を明らかにできたものはない。また方形住居址は、後世の削平による影響や、住居址同士の切り合いが激しく、遺存状況はよくなかった。

**SH01** (図版3) 調査区の南西隅において検出された。調査したのは北東部分の1/4である。2基のピットが切り込むだけで、同時期の遺構と顯著な切り合いは見られない。

形状は円形で、調査では全容が明らかにできなかつたため、主軸の方向・角度はわからない。長軸は東西方向で、全長3.78m・直交する最大幅は、3.35mをそれぞれ測る。最深は、調査区西壁付近で0.12mである。床面は中央に向かって緩やかな傾斜をもつて検出された。

屋内施設は、柱穴・屋内土坑・周壁溝がある。検出した柱穴は1基だけで、柱穴直径は0.42m・深度0.12mの円形であった。屋内土坑は、調査区の南西コーナー付近に位置する。南北に長軸を向ける楕円形で、長軸0.88m・最大幅0.67m・最深0.13mをそれぞれ測る。埋土は淡褐色シルト質細砂で、内部からは土師器の縞片がわずかに出土した。周壁溝は1条で検出した範囲では周壁に沿って完周する。溝の幅は0.10～0.18m・深度は平均して0.06mを測る。

出土遺物としては、周壁溝に落ち込む形で完形の土師器鉢(38)が出土したほか、埋土中に細片化した土師器が数点含まれていた。

**SH02** (図版3) 調査区の北西隅で検出された。調査したのは南東部分の1/4である。他の遺構とは切り合いを持たない。

形状は円形で、主軸方向・角度は不明。長軸は南北方向に向け、全長4.23m・最大幅3.54mであった。最深部は調査区の南西コーナー部分で、検出面から0.18mを測る。床面はほぼ平坦であった。

屋内施設として、柱穴・屋内土坑・周壁溝がある。床面で円形のピットを5基検出したが、主柱穴と考えられるものは2基。直径は0.38m・深度は平均して0.40mの円形である。屋内土坑は、検出した床面のほぼ中央に位置する。わずかに東西方向が長い楕円形で、長軸0.84m・最大幅0.75m・最深0.11mをそれぞれ測る。埋土は茶褐色シルト、内部から土師器の縞片が出土した。周壁溝は1条が周壁沿いにめぐるが、完周せず2箇所で断絶する。溝の幅は0.15～0.21m・深度は平均して0.10mを測る。

出土した遺物で図化できたものは、北周壁に近い床面で検出した土師器の器台(29)、床面に近い埋土からは土師器甕(31)である。

**SH03** (図版4) 調査区の南部中央に位置する。全体が調査区内におさまるが、南壁はSH10を切り、西壁はSX03によって消失する。

方形の整穴住居で、遺存する北東のコーナーから、長軸は東西方向と考えられる。長軸角度は、N-11°-W、全長は3.00mと推定できる。短軸は全長2.90mで、床面積は8.7m<sup>2</sup>と小規模である。最深部は西辺中央で、0.15mを測る。床面のうち東部については、上層から切り込むSX03によって失われている。

屋内施設には柱穴がある。なお、北西隅で周壁沿いに屈曲する小土坑を検出したが、遺物の出土もなく性格は明らかにできなかつた。柱穴は3基検出した。南東部では床面の削平に伴い消失したのである。柱穴は、長径0.37m前後・短径2.80m前後の楕円形を呈する。

埋土から須恵器・土師器が出土したが、図化できるものはなかった。また滑石製紡錘車(S-1)は南東の周壁に近い位置で検出できたが、住居に伴うとは言い切れない。

**SH04** (図版4) 調査区の中央に位置し、全体が調査区内におさまる。西壁はSH06を切る。

方形の整穴住居で、長軸は南北方向にとる。長軸角度はN-6°-W、全長は3.75mを測る。短軸長は3.20

mで、平面は東周壁が長い台形を呈する。床面積は、12.00m<sup>2</sup>である。最深部は北辺中央で、0.15mを測る。床面には、上層から切り込むピットなどが多く見られたが、遺存する部分では平坦であった。

柱穴のはか、南周壁に沿って長楕円の土坑が2箇所認められる。いずれも短小で周壁溝の一部ではない。他の屋内施設は検出できなかった。柱穴は4基で、柱穴直徑は0.28～0.40m、深度0.15～0.20mを測る。いずれも、わずかに楕円形の平面形を呈する。

須恵器の杯身（50・52・53）をはじめ、埋土からは須恵器・土師器片が比較的多く出土した。

**SH05**（図版5） 調査区の中央北寄りに位置する。西壁付近の一部がわずかに調査区外へ及ぶ。また北西部では床面上まで、検出面が削平を受けており周壁が失われていた。

北側のSH12とは0.5m、南側にあるSH04とは0.7mの間隔で、近接して存在する。またSD09が北東～南西に横断するが、床面は溝底を完全に切っている。

平面形は方形、長軸は東西に向ける。最大長と考えられる西壁の中央が検出できなかったが、南寄りの部分で全長3.90mである。角度は、N-7°-Wである。短軸は3.60m、床面積は14.04m<sup>2</sup>であった。最深部は南辺中央で、0.11mを測る。床面はほぼ平坦であった。

柱穴以外に、屋内施設は認められない。4基の柱穴は直徑0.20～0.37m、深度0.15～0.25mをそれぞれ測る。柱穴形状はいずれも正円形で、ほぼ等間隔の位置で検出された。

遺物は埋土を中心に比較的多くの須恵器・土師器片が出土しているが、図化できるものはなかった。また、先行する時期の遺物であり、SH05とは直接関連するものではないが、断ち割りにおいて、土師器甕の底部（37）が出土した。住居址に切られたSD09との関連が考えられる。

**SH06**（図版6） 調査区のほぼ中央に位置する。周辺は住居址が密集し、東壁をSH04に切られ、また西壁はSH07・09をそれぞれ切る。また南西隅付近は、上層から切り込むSX04によって消失する。

検出した平面形は方形だが、南壁が若干短く台形に近い。長軸は東西方向に向く、4.00m・角度は、N-3°-Eを測る。短軸の全長は、3.90m・床面積は、15.6m<sup>2</sup>である。最深部は北辺中央で、0.17mを測り、床面はほぼ平坦であった。

床面において、柱穴と考えられるピットが多く検出されているが、配置・特徴ではいずれが主柱穴か判別できなかった。いずれも直徑は0.25～0.30m前後の正円形で、深度も0.15m前後に共通する。

出土遺物は今回検出した住居址では最も多い。床面に近い埋土からは、須恵器杯蓋（47・48）・杯身（54・55・56）・翫（62）・高杯蓋（63）・盞（64）などが出土した。このほか特筆すべきに、床面直上から出土した子持勾玉（S-2）がある。なお、埋土から出土した土師器甕（42）は混入品と考えられる。

**SH07**（図版7） 調査区の中央から、やや西寄りに位置する。SH08・09を切り、SH06に切られる。また南東部はSX04によって消失する。

形状は方形だが、西壁に直交する北壁に対して、南壁は東に広がりを見せる。東壁をSH06とSX04に切られ、プランの乱れが著しいため、平面規模の全容は不明。それぞれの最大幅は、南北が3.50m・東西が3.25mを測り、現状での床面積は11.37m<sup>2</sup>を測る。最深部は北辺中央で0.12m、床面は北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する。

屋内施設には、柱穴がある。床面では3基の柱穴が検出できた。南東隅にあたる1基については、SX04の影響により消失する。柱穴は直徑0.35m前後を測る正円形、深度は平均0.20mであった。

埋土から土師器甕（32）・土師器甕（44）・須恵器杯蓋（49）・須恵器杯身（51・57・58）・円筒埴輪（68）などが出土している。土師器甕・甕・埴輪はいずれも1点のみの出土で、混入品と考えられる。

**SH08** (図版8) 調査区の中央から、やや西寄りに位置する。SH09を切り、SH07に切られる。また南コーナー付近は、上層から切り込む土坑によって消失、南東壁はSD09の西溝肩を切る。

形状は方形。長軸は東西方向に向け、全長4.10m・角度は、N-40°-Wを測る。短軸の全長は、3.73m・床面積は、15.29m<sup>2</sup>である。最深部は北コーナー部分で、0.18mを測る。床面はほぼ平坦であった。

屋内施設は、柱穴がある。床面ではピットが数基検出されているが、主柱穴と判断されるものは3基で、0.30m前後の正円形、深さ0.25mを測る。

出土遺物は他の住居址と比較して少ない。須恵器杯身(59)・土師器壺(67)などが出上した。

**SH09** (図版7) 調査区のはば中央に位置する。周辺は住居址が密集し、それぞれに切り合いが見られるが、東壁をSH06、西壁をSH08、南部をSH07に切られ、北壁の一部がわずかに遺存する。また、SD09を切っている。

形状は方形だが、激しい切り合いによって、本来の規模はわからない。遺存する北壁は、北西のコーナーがわずかに遺存し、3.73mを測る。最深部は北西部で0.13mを測る。遺存部分の床面はほぼ平坦である。屋内施設としては、柱穴と考えられるピットが1基検出できた。形状はほぼ正円形で、直径は0.26m、深度は0.15mを測る。出土遺物には、須恵器杯身(60)がある。

**SH10** (図版4) 調査区の南部中央に位置する。半分以上が調査区外に及ぶと見られるが、北壁はSH03に、東部はSX03によって消失し、全容は不明な点が多い。検出できた周壁の一部は北東隅で緩やかなカーブを描き、円形もしくは隅丸方形の平面プランと考えられる。

最深部は、調査区にかかる西端部分で0.05mを測る。切り合いを持つSH03の床面よりも0.10mほど高い。床面は北壁周辺のみ遺存、SX03による削平を大きく受けている。

屋内施設は検出できなかった。埋土から土師器の細片が若干出土した。

**SH11** (図版2) 調査区の北壁中央で検出された。大半が調査区外に続くと考えられ、一部をわずかに調査したにとどまる。上面をSD08に切られて、床面付近のみが遺存する。近接するSH13とは直接の切り合いはないが、SD08との関係から判断して先行すると考える。

周壁は緩やかな円弧を描き、平面は円形と考えられる。全体の規模は不明。最深部は、調査区の北壁付近で0.05mを測る。検出した範囲における床面は、ほぼ平坦であった。

屋内施設は見られなかった。また、遺物は埋土から少量出土したが、岡化できなかった。

**SH12** (図版5) 調査区のはば中央北寄りに位置する。全体が調査区内で検出された。北東部を後世の溝によって切られるほか、南東コーナー付近でSD09を切る。

方形の堅穴住居で、長軸は南北方向にとる。長軸角度はN-42°-W、全長は3.45mを測る。最大幅は3.00mで、床面積は10.35m<sup>2</sup>と小さい。最深部は北コーナー付近で0.09m、床面は平坦であった。

屋内施設としては柱穴がある。4基がコーナー付近に等間隔で配設される。直径が0.25～0.40mのほぼ正円形を呈し、深度は0.10～0.18mを測る。

埋土から須恵器・土師器が数点出土したが、岡化できたものは土師器壺(39)の1点のみであった。弥生時代末～古墳時代初頭の特徴を持ち、共伴する遺物の様子から混入品と判断できる。

**SH13** (図版2) 調査区の北壁中央で検出された。大半が調査区外に続く。近接するSH11とは直接の切り合いを持たないが、SD08を切っていることから見て、後出するものであろう。

2列の周壁が直交し、方形住居の南コーナー付近にあると考えられる。全体の規模は不明。最深部は調査区の北壁付近で、0.10mを測る。検出した範囲の床面は平坦であった。

屋内施設は、検出できなかった。遺物は埋土から土師器壺（40・66）が出土した。

**SH14**（図版7） 調査区の東部、北壁に沿いで検出された。調査したのは南部分の1/2にあたる。SD10の北端が周壁に接して存在するが、直接の切り合いは持たない。

検出した限りにおいては、コーナーの丸みが大きい隅丸の方形を呈する。調査において本来の主軸方向・角度は明らかにできなかった。検出した最大幅は、東西方向で3.52m・直交する部分で1.51mをそれぞれ測る。最深部は調査区北壁に接する部分で、0.13mを測る。床面はほぼ平坦であった。

床面上において、ピットが3基検出されたが、配置から主柱穴と確定できたものはない。直径は0.28m前後、柱穴形状は、ほぼ正円形である。

埋土から出土した遺物のうち図化できたものは、古墳時代初期の土師器壺（41）、須恵器の長頸壺（61）がある。遺物の内訳は須恵器が大半をしめるため、（41）は混入品と考えられる。

**SH15**（図版6） 調査区の中央部に位置する。南東部分の1/2近くを擾乱坑によって切られ、消失する。他の遺構との切り合いは生じていない。

方形と考えられるが、本来の主軸方向・角度は不明。最大幅は擾乱坑付近の南北で4.40m・直交する部分は2.42mである。最深部は中央で、0.13mを測る。床面は平坦であった。

床面では、主柱穴の北2本分にあたるピットを検出した。直径は0.28m、深さ0.18mで、ほぼ正円形であった。出土遺物には、須恵器の壺頭部（65）ほか数点が見られた。

## 2. 堀立柱建物

4棟を、すべて第2遺構面で検出した。調査区の西部に集中し、それぞれに切り合いが生じている。いずれも調査区外へ続き、建物群は調査区の東側へと展開する。遺物の出土した柱穴が少なく時期決定は困難であるが、同一面で検出された井戸の出土遺物などから、13世紀代に営まれたと考えられる。

**SB01**（図版10） 調査区の東部・南寄りに位置する。北側柱穴列がSB02と重なる。

調査区内においては東西4間×南北2間を確認したが、南側および西側が調査区外へ拡がる。長軸にあたる東西方向の全長は8.25m・南北4.77mで長軸角度はS-78°-Wを測る。検出した範囲での床面積は3.93m<sup>2</sup>以上である。

構成する柱穴は全部で13基を数える。いずれも正円形で、平均径は0.30m・平均深度0.15mをそれぞれ測る。長軸の柱穴間平均は、西端から第3列までは1.8mの等間隔を保ち、西寄りの2列は乱れが生じている。一方短軸側は、2.3mの等間隔で配置される。

柱痕跡の確認できたものは9基を数える。柱穴に対する特別な施設はない。柱穴の掘り方から鉄器（I-I）・土器が出土したが、時期を特定するには至らなかった。

**SB02**（図版11） 調査区の東部中央で検出した。北側にはSB03・04、南側にはSB01がある。SB01・04とはそれぞれ重なる一方、0.60mまで接近するSB03とは、直接の切り合いを有さない。

調査区内においては東西3間×南北2間を確認した。西側は調査区端に接近しており、さらに調査区外に延びる可能性が高い。長軸にあたる東西方向の全長は6.70m・南北4.22mで長軸角度はS-84°-Wを測る。検出した範囲での床面積は28.2m<sup>2</sup>以上である。

構成する柱穴は全部で12基で、平均径0.28mの正円形・平均深度0.16mを測る。長軸側の柱間距離は、最も東側の柱間が若干広いが、平均して2.3mを測る。短軸側は、ほぼ2.1mの等間隔である。

柱痕跡の確認できたものは10基で、柱穴内に特別な施設は見られない。掘り方の埋土から、土器の細片が出土したが、時期は特定できなかった。

**SBO3** (図版11) 調査区の東部中央で検出した。南側のSB02とは至近距離に存在し、北東においてSB04と重なりが生じている。東3.3mにはSE01がある。

東西3間×南北2間分を調査区内で確認した。西側は調査区端に接近するため、調査区外へ延びる可能性が高い。東西方向の全長は5.73m・南北3.73mで、長軸角度はS-85°-Wである。検出範囲における床面積は21.3m<sup>2</sup>以上を測る。

建物は11基の柱穴で構成、中央の柱穴列で最も西側の柱穴を欠く。平均径0.28mの正円形・平均深度0.16mを測る。柱間距離は、東西が1.9m・南北が1.8mでそれぞれ等間隔を保っている。

柱痕跡は8基において確認した。柱穴内に特別な施設は見られなかった。掘り方の埋土から、土器の細片が出土したが、時期は特定できなかった。

**SBO4** (図版10) 調査区の北西隅で検出した。SB03の西部・SB02の北西隅と重なりを生じる。

東西1間×南北2間を検出した。大半は調査区外に存在し、南東隅の一部分を調査するにとどまった。南北方向の全長は4.18m・南北2.72mを測り、主軸角度はS-71°-Wである。

検出した柱穴は5基で、平均径0.37mの正円形・深度はバラツキが大きく、0.10~0.27mを測る。柱間距離はそれぞれ2.4mと等間隔である。

柱痕跡が遺存するものは2基で、特別な施設を持つものは存在しない。掘り方の埋土から上器の細片が出土したが、時期を特定できるものはない。

### 3. 特殊土坑

調査区内で検出した土坑のうち特異なもので、対象となる遺構は4基ある。

**SX01** (図版8) 第1遺構面・調査区の東部端で検出された。平面は楕円形で、長軸を東西方向にとる。長軸の全長は0.66m・直交する最大幅は0.60m・最大深度は0.18mをそれぞれ測る。西側の壁面が垂直に近く、他の壁面は中心に向かって緩やかにすぼまる。底面はわずかな起伏があるものの、ほぼ平坦であった。

出土遺物は、高杯(30)・器台(28)がある。いずれも床面の直上で検出、(28)は脚部を接地させ、(30)は皿部を床面に伏せてそれぞれ出土した。欠損する部位は埋納前に打ち欠いたと考えられるが、土坑の性格を特定する状況は得られなかった。出土した遺物は、高杯の形状などから弥生時代末~古墳時代初頭に比定できる。

**SX02** (図版9) 第2遺構面・調査区の東部で検出された。擾乱坑に近接、周辺の遺構面が削平を受けていたため、検出段階すでに北側の土器が露出していた。

削平の影響から半面形に乱れがあるが、長楕円形で長軸を北西~南東に向いている。長軸の全長は0.92m・直交する最大幅は0.41m・最大深度は0.18mをそれぞれ測る。壁面は緩やかなすり鉢状を呈する。底面はほぼ平坦であった。

土坑の中央からは、土師器が2個出土した。出土遺物は上面が欠損する北側(131)・南側(130)とともに丸形で復元できた。床面の直上に、それぞれ口縁を向かい合わせて横たえる。(130)は頸部に鈎を持つ形態で、口縁は基部から打ち欠かれ(131)の口縁に挿入されていた。(131)は広口の口縁を持ち、南側の鈎に乗せて組み合わせる。埋土はすべて土壤化し、特別な内容物は見あたらなかった。

出土した遺物は、7世紀中葉の特徴を有する。口の合わせ方を意識した丁寧な埋納状況から、土器を利用した墓と判断できる。なお、同時期の遺構は今回の調査範囲内では確認されていない。

**SX03・04** (図版1) 第1遺構面の北側で検出された不整形な土坑で、方形住居群に切り込む

形で検出された。埋土は小砾を含む灰褐色の中砂で、第1包含層と共通した特徴を持つ。内部からは多くの遺物が出土しているが、それぞれの示す年代間にはバラツキが大きい。

上層の包含層が深く切りこんで造構面に影響を及ぼした結果、形成されたものであろう。

#### 4. 井戸

第2造構面の中央で1基検出された。SB03の東3.3m、SD01の西5.5mに位置する。

**SE01** (図版12) 素振りの井戸で、平面は直径1.14mの円形、深度は中央で0.72mである。断面形は方形に近く、西側周壁は傾斜がわずかに大きい。底面はほぼ平坦であった。

最下層の埋土である灰褐色粗砂の内部ならびに上面から、瓦器碗(103~111)・瓦質小皿(114)・土師質小皿(113・115~117)が出土した。いずれも遺存状態は良好で、一括で投棄されたと考えられる。造構の時期は、遺物の年代感から13世紀中葉と考えられる。

#### 5. 溝

それぞれの造構面で多数見られたが、遺物の出土があったものは、第1造構面で5条・第2造構面で5条である。第1造構面では北東→南西方向、第2造構面では、南北方向が多い。

**SD01** (図版2) 第1造構面の中央東寄りを流れる。調査区外に統き、直線的に南北の正方向を指向し、溝の幅も大きな乱れはない。断面はU字形で、埋土からは須恵器・土師器が出土した。

第1造構面で検出した中世の造構群は、この溝よりも西側に存在する。規模や方向に高い規則性が窺えることからも、集落の境界を限る役割を果たしていたと考えられる。

**SD08** (図版1) 第2造構面の西部を、南西から北東へ向けて横切る。底面レベルは北東側が低い。北端は調査区外に延びるが、以後の方向は不明。土師器では壺(33・34・36)・蓋(35)・鍋(43)、須恵器は杯蓋(45・46)と、幅広い時期の遺物が出土している。近接する方形住居群には先行すると考えられるが、出土した須恵器から古墳時代後期と考えておく。

**SD09** (図版1) 第2造構面の西部を南西から北東へ向けて横切る。SD08とは平行して検出された。底面レベルは北東側が低い。

埋土中からは、完形個体あるいは大破片の土師器が多く出土している。埋土中に浮き上がって検出されたものはわずかで、大半は良好な遺存状態のままで溝底から出土した。壺・壺・高杯・鉢など(1~27)があり、特徴から弥生時代末~古墳時代初頭に比定できる。

なお、他の溝については、概要を一覧(表4)にまとめた。

#### 6. 土坑・ピットその他

それぞれの造構面において、数多くの土坑ならびにピットが検出されたが、出土遺物も持たず、小規模なものが大半を占める。

**SP139** (図版12) 第2造構面の中央からやや南寄りで検出された。基礎跡の擾乱に近接し、かろうじて消失を免れている。平面は直径0.32mの円形。深度は0.13mで断面は台形を呈する。底面は中央に向かってすり鉢状になり、直上では遺物が重なって検出された。同化できたのは土師器甕(102)だけだが、比較的多くの須恵器・土師器が出土した。

このほか、第2造構面のSP09・67・80・113・118で遺物が出土した。いずれも埋土から、1点または数点が細片化しての出土である。ピット列は第2造構面で2条(SA01・SA02)検出した。いずれも性格を明らかにする証左は得られなかった。

## 第4章 調査成果－出土遺物

### 第1節 土器

今回の調査で遺物の大半を占める土器は、土師器・須恵器・瓦質土器などが見られる。また土器以外では、埴輪・石製品・鉄製品が出土した。以下、概要を種別・器種ごとに分類して記述する。

**1. 土師器（図版13~16）** 弥生時代末~古墳時代初頭と、その他の時期に大別できる。出土量・遺存状況ともに前者が優位を占め、壺・甕・蓋・高杯・器台などが出土した。

**壺（1・2・6・8・10・14~17・22・24~26・42）** SD09出土遺物が大半を占める。1は頸部が外反して口縁部に至る広口壺で、口縁端部を上方に拡張する。端面と肩部には、櫛状工具による刺突文を施す。2は体部に比べて頭部が小さく、端面は丸くおさめる。6は頭部が直立気味で、肩・口縁部で大きく開く。いずれも外面上には縦方向のハケが密に施される。小型の8は頭のくびれが少なく、大きく外方へと開く。縦ハケの後、胴部のみタタキで成形、底部にかけてはケズリで調整する。10はさらに頸のくびれが少なく直立する。外面上はナデ調整を施し、底部付近を板ナデ調整する。長頸壺は、頸部から直立気味に口縁部に至る15と、口縁部で大きく外反し端面を拡張する17がある。17は端面に四線と円形浮文を付す。端面に縦陶文を配した16も口縁部のみ出土したが、同じ器形の可能性を有する。

このほか、底部のみ出土した破片の中で、壺と考えられるものがいくつか存在する。

**甕（3・5・7・9・11・12・18~23・25・27・31~34・36・37・41・44・66・67・102・130・131）**

弥生時代末~古墳時代初頭のものは、突出する平底を有し体部をタタキで成形した、伝統的なV様式系の形態である。口縁部は単純な「く」の字形、胴部は最大径となる中心で大きく膨らむ。分割成形による接合の痕跡を、明瞭にとどめるものが多い。体部は斜め上方へのタタキで調整し、その後に粗いハケメを加えるものもある。底部もタタキを施し、側面に沿って強い横ナデもしくは指押さえで成形する。

32は口縁端部が屈曲・直立し外側に凹線を施す。口縁部付近がわずかに遺存するにすぎないが、古備系土器の影響を窺わせる。

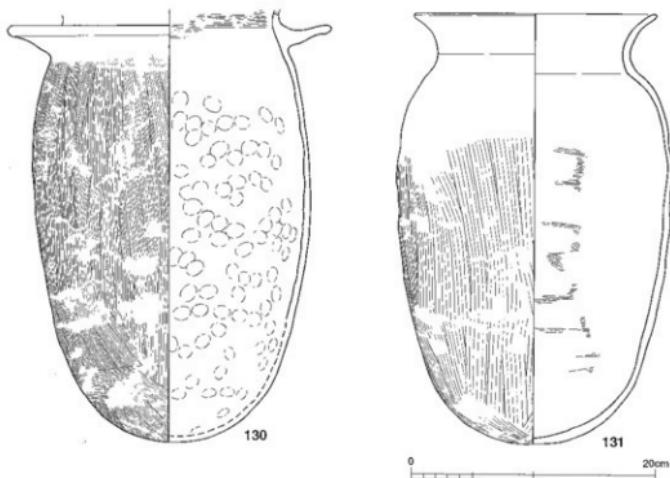
このほか、底部のみが出土した破片のうち、形態や製作手法から甕に比定できる破片も多い。

66・67・102は口縁部のみが遺存する。摩滅等により調整は不明だが、共伴する遺物や胎土、形態などから古墳時代後半以降の所産と考えられる。

130・131（第2図）は、SX02で棺身として利用されていた。130は肩部に上向きの鈎を有する長胴の甕で、口縁を打ち欠く以外は完形に復元できる。外面は丁寧なハケメを施し、内面は口縁部付近のみを横ナデ、体部には指押さえの痕跡が明瞭に残る。131は平底気味の底部を持つ砲弾型の甕で、張り気味の肩部と大きく外反する口縁部を有する。

**蓋（35）** 1点だけ出土した。頂部の中心をくびれさせて、ツマミを形成する。口縁端部は欠損するが、笠型の形態を呈するのであろう。体部の内外面にヘラミガキ痕をとどめる。

**高杯（13・30・100・101）** 30は大型の高杯で、脚部以下を欠損する。浅い皿部は大きく屈曲しながら口縁端部に至る。端部は上下に拡張し、縁に刻み・端面と屈曲部分に凹線を加える。内外面とも丁寧なハケメで調整する。13は脚部のみが遺存する。円柱状で、皿部・握部において大きく開く。外面上は縦方向のハケメで調整。100は屈曲部の形態化が進んでいる。脚部は円錐状で、握部で大きく開く。101は器壁が厚く、形態には銳さが見受けられない。



第2図 出土遺物実測図(1) SX02出土土器

**器台** (28・29) 2点出土した。28は受け部を完全に欠損する。脚部は裾部に向かって大きく開き、端部は方形に整形する。上端に沿って2列に刻み目を配する。脚部には3箇所で上下に円孔を空ける。29は受け部・裾部が大きく開く。受け部端部は方形に垂直に成形する。

**鉢** (4・38) 4は底部に6箇所の貫通孔を持つ有孔鉢で、平底から直線的にたちあがる形態を持つ。38は孔を持たない小型の鉢で、緩やかに内湾しながら口縁部にいたる。

**蛸壺** (98・99) いずれも釣手部分のみが出土している。外面は手づくねの後、ヘラ状工具で成形する。98は内面に成形時の指痕が彫る。

**鍋** (43・121) 把手部分のみが出土した。全容の形状は明らかでない。

**2. 須恵器** (図版14・15・16) 杯・杯蓋・高杯・壺・甕・提瓶・甌・観などが出土した。大半は古墳時代後期の形態を有し、他の時期のものはごく少量であった。

**杯** (50~60・78~92) すべて古墳時代に該当し、口径・細部の形態にバラツキが認められる。

たちあがりは、51や56のような長く直立するものと、短く内湾するものがある。口縁端部はわずかに屈曲する81や段をなす80もあるが、丸くおさめるものが多い。受け部は短く斜め上方を指向する。

製作手法は、内面をいずれも回転ナデで調整、中央では仕上げを施す。仕上げは一定方向にナデを施すもの他、54・81では同心円のスタンプが見られた。外面は、口縁～体部を回転ナデ、底部付近は体部にかけての幅広い範囲にヘラ削りするものが多い。46はヘラ切り未調整である。

**蓋** (45~49・63・69~77・93) 古墳時代の杯に対応するものが大半を占めるが、高杯や短頸壺の蓋と考えられるものが少量存在する。

杯蓋は、天井部にツマミを持たない形態で、稜線は退化・または形骸化したものが多い。天井部は平坦で、口縁部にかけて丸く延びる。凹線を巡らせた2のはかには、天井部と体部の境界が明瞭ではない。

作り方は粗雑で、端部に歪みを生ずるものもある。口縁端部は丸くおさめる。

内面は回転ナデで調整し、中央に仕上げナデを施す。天井部外面は回転ヘラ削りを施すものがほとんどだが、一部で回転ヘラ切りの痕跡をそのまま残すもの（46・74）がある。口縁部周辺は、内外面ともに回転ナデによる調整を行う。

高杯蓋（63）は天井部のみが遺存し、全体の形状はわからない。ツマミの周囲には梯排列点文を帶状に巡らせる。また短頸蓋（93）は口縁部から直線的に体部にいたり、屈曲して天井部を形成するものと、天井部に宝珠ツマミ・内面にカエリを持つものがある。奈良時代のものでは、口径が大きく皿の蓋と考えられるものが見られた。

鰐（95） 頸部から上を欠損している。体部はより球形を指向し、肩部には鈍い凹線が1条めぐる。穿孔の周囲を縦に櫛書きの刺突文を施す。底部は内面より突き出して成形、不定方向のヘラ削りで外面を整える。体部は下半部に平行の櫛書きを施す。

提瓶（94） 口縁部だけが残存する。体部から直線的に開きつつ口縁部へ至る。口縁部はわずかに外反気味で、端部に至り直立する。

壺（61・62・64・65） 広口壺・長頸壺・短頸壺などがある。大半は口縁部のみが遺存する。

61は長頸壺の口縁部で、頸～壺部に向かって大きくラッパ状に開く。内傾する端面は、強い横ナデによって段状に屈曲する。62は口縁部付近を欠損するが、体部の形態から短頸壺に比定した。丸底の底部は外面をヘラ削り調整する。また肩の張る体部は、丁寧なカキメを施す。

64は大型の広口壺で、底部の一部を除き、ほぼ完形に復元できた。口縁部は外方に開き、端部を上下に拡張させて縁をなす。体部は中央で最大径を測る球形、タタキによって成形後、粗いカキメ調整を施す。65もわずかに口縁部の外反が大きいが、端部の形態や調整は共通する。

高坏（96） 脚部のみが出土した。スカシが消失し、脚部の小型化が進んだ形態である。裾部と脚柱部の肩曲部分に凹線状の沈線を巡らす。裾部は大きく開き、端部は外側に面をもつ。

甕（97） 口縁～頸部が遺存する。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部はさらに大きく外反する。端部を外側に折り返して玉縁状に形成する。頸部外面には「U」のヘラ記号を描く。

図化できなかったが、このほかにも体部の破片と思われる破片が大量に出土している。

3. 瓦質土器・土師質土器（図版17） 瓦器椀・瓦質小皿・土師器皿・瓦質鍋などがある。

瓦器椀（103～112・120・122） いずれも底部に高台を持つ。高台は外湾気味に開く122や逆三角形の112をのぞいて低く形態化し、底部が床面よりも低くなるものも多い。緩やかに湾曲しつつ体部から口縁部へ至り、外面のU縁直下に横ナデを加えてわずかに外反させる。U縁端部は丸くおさめる。

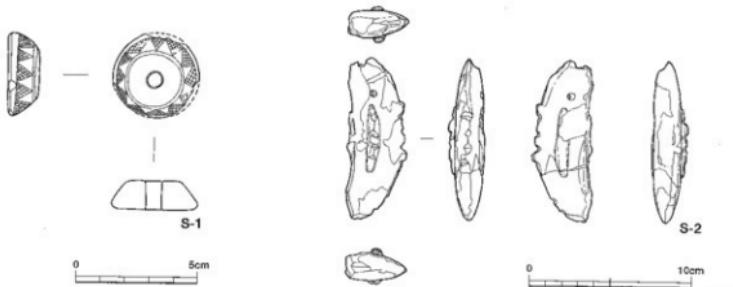
調整はU縁部付近を横ナデ、体部外面には指押さえの痕跡が顕著。底部には高台張りつけ時のナデを施す。内面には暗文を持つものが多く、見込み部には平行線・体部内面には渦巻き状の暗文を描く。

瓦質小皿（113・114） いずれも内面に渦巻き状の暗文を付す。113は半底の底部から緩やかに内湾して口縁部に至る。端部は丸くおさめる。114は、底部外面に指押さえ痕が顕著で不安定。U縁部の外面に強い横ナデを加えて、屈曲気味にたちあがる。端部は丸くおさめる。

土師器皿（115～118） 115～117は平底で、体～口縁部が内湾気味にたちあがる。口縁部に沿って横ナデを施し、端部は丸くおさめる。底部は115が平坦、116・117は中央がわずかにくぼむ。

SP09から出土した118は、底部に回転糸切り痕跡を残す。外面は部分的に赤褐色を呈する。

瓦質鍋（91） 内外面ともに、口縁部付近は横ナデによる調整。体部外面はナデの後、板状工具によ



第3図 出土遺物実測図(2) 石製品

る押さえ。内面はナデの後、先端の細い棒状工具によって突き出して成形する。

#### 4. その他 (図版17) 緑釉陶器・硯・墨書き土器・漆付土器がある。

緑釉陶器 (125・126) 底部のみが遺存する。内外面に緑釉があり、内面は遺存する範囲の全面に、外面では125が輪高台の外側面から体部、126が輪高台より外側の体部に施釉される。

硯 (127) 風字硯の基部にあたる。中央には使用による研磨痕跡が顕著。包含層から出土した。

墨書き土器 (128) SH06検出時に出土。杯蓋の外観？に墨痕を認めるが、字は判読できなかった。

漆付土器 (129) 周縁がすべて欠損し器形はわからないが、杯または小型の壺の一部であろう。内面の広範囲に漆が付着している。

## 第2節 その他の遺物

土器以外の遺物として、埴輪・石製品・鉄製品などがある。

1. 塩輪 (図版15) SH07の埋土中から1点(68)出土した。遺存状況が悪く、単独の出土であることから、混入品と考えられる。円筒部のタガ付近が遺存。外面に綫方向のハケメを施し、タガの上下に沿って貼り付け時の横ナデをとどめる。須恵質焼成で、タガの断面が偏平化している。

2. 石製品 (第3図) SH03に接する遺構面直上の包含層から滑石製紡錘車 (S-1) が、SH06から子持勾玉 (S-2) がそれぞれ出土した。

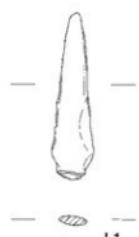
紡錘車は底径3.5cm・頂径2.2cmの断面台形で、高さ1.2cmを測る。中央には直径0.7cmの円孔が、円柱状に穿たれる。側面には鋸歯文が線刻されている。

子持勾玉は、全長9.9cm・最大幅は中央で3.7cmを測る。子は退化が著しく、棒状の突起に線刻を加えて表現する。断面は2.15cmで弧の内側が厚い。石材の質は悪く、表面には剥離痕が多数見られる。

3. 鉄製品 (第4図) 6点が出土しているが、細片化・錆化が進み本来の形をとどめていたのはSB01の柱穴埋土から出土した1点(I-1)だけである。他はいずれも包含層から出土した。

I-1 全長6.8cm・最大厚0.65cmを測り、片側を欠損する。最大幅は欠損部側に大きく偏りをみせ、1.75cmを測る。断面は端部に向かって厚みを減じる。端部は鈍化して、刃の有無については確認できなかった。

第4図 出土遺物実測図(3) 鉄製品(s=1/2)



第1表 出土土器観察表(1)

No.	種別	等級	出土深度	口径	晩高	底径	調整および備考	
1.	土師器	素	SD09	12.0	19.0	19.0	口縁部は上方へ延長、周辺にはナデ。体一部部は縦方向のハケメを有す。口縁部側は下方へ延長する。内面は口縁～底部にかけてナデ、接合部の痕跡が確認され、調整が困難。	
2.	土師器	素	SD09	12.1	10.3		口縁部は下方へ延長する。内面は口縁～底部にかけてナデ、接合部の痕跡が確認され、調整が困難。	
3.	土師器	裏	SD09	19.2	5.9			
4.	土師器	朴	SD09	14.6	10.2	3.7	内・外面ともにナデ。底部は縦方向のハケメ。内面は摩耗のため調整が不規則だが、底部内面には複数ある痕跡。	
5.	土師器	裏	SD09	11.2	15.0	4.5	内・外面ともにナデ。底部内面の中央には複数ある痕跡。	
6.	土師器	裏	SD09	18.3	28.5		内・外面ともにナデ。底部内面は口縁部にかけてナデ。	
7.	土師器	裏	SD09	13.6	13.1	16.0	口縁部はナデ。基部は横方向のハケメで、全体的にナデ。内面は口縁部をナデ。底部付近は横方向へ延長、全体にかけてハケメ。内面は口縁部をナデ。底部付近はナデ。内面は口縁部にかけてナデ。	
8.	土師器	素	SD09	13.3	18.5	5.2	口縁部は内面と外面ともにナデ。体部は中央部分を横方向の平行タキ。他は縦方向のハケメ。底部付近はナデ削り。底部内面はヨコナデ。内面は脚部にかけてナデ。	
9.	土師器	裏	SD09	14.5	16.4	4.5	口縁部は内面と外面ともにナデ。体部は口縁部は縦方向のハケメ、底部内面は横方向のハケメ。	
10.	土師器	裏	SD09	9.6	10.0	5.1	内面は口縁部をハケメ。底部付近にはナデ削り。内面は底部内面に板ナデ、口縁部付近は横ハケメ。	
11.	土師器	裏	SD09	16.8	28.7	6.5	底部のみが摩耗。外面は口縁部は横方向のハケメ。内面は摩耗が著しく調整不良。	
12.	土師器	裏	SD09	15.4	17.2		体部外縁は横方向の平行タキ。底部付近は横方向のハケメ。他は摩耗のため、調整不良。	
13.	土師器	高杯	SD09		9.2		脚柱部の外縁は横方向のハケメ。底部の中央にはナデ。内面は脚柱部に板ナデ、中央部はヘラ削り。	
14.	土師器	裏	SD09		2.9	4.9	外面は口縁～底部を横方向のハケメ。底部の外縁は横ナデ。内面は摩耗により、調整不明。	
15.	土師器	裏	SD09	17.0	9.8		底部のみが摩耗。外面は口縁部は横方向のハケメ。内面は摩耗が著しく調整不良。	
16.	土師器	裏	SD09		2.4		口縁部の表面には墨書き。調査する範囲はヨコナデ。	
17.	土師器	蓋	SD09	32.4	13.1		下部に肥厚する。脚柱部は凹縫線と円溝状の凹溝。口縁部外縁はナデ。底部は横方向のハケメ。内面は口縁部が摩耗のため調整不良。底部内面は横方向のヘラ削り。	
18.	土師器	裏	SD09	12.5	8.5		口縁部外縁は横ナデ。頸部から全体にかけてタキ。内面はヨコナデのため、調整不良。	
19.	土師器	裏	SD09	13.8	12.6		口縁部外縁は横方向のハケメ。内面はヨコナデ。	
20.	土師器	裏	SD09	17.8	10.1		摩耗のため、調査不良。	
21.	土師器	裏	SD09	14.8	28.8	6.3	底部のみが摩耗。外面は口縁部は横方向のハケメ。内面は摩耗が著しく調整不良。	
22.	土師器	裏	SD09		4.2	5.2	口縁部の表面には墨書き。底部は内面を斜めに削り押さえ。底部外縁はナデ。内面は底部中央部を横ナデ。他はナデ。	
23.	土師器	燃	SD09		7.9	6.1	底部外縁はナデ。底部側面～体部にかけては、横方向への平行タキ後、ハケメ。内面はヨコナデ。	
24.	土師器	裏	SD09		4.3	7.1	体～底部外縁は横方向、底部側面は横ナデ。内面は底部中央を板ナデ。	
25.	土師器	甕	SD09		2.8	6.7	底部外縁～底盤部をとめる。体部外縁は横方向の平行タキ。内面は中心から放射状にタキ。	
26.	土師器	素	SD09		10.0	4.0	体部外縁は横方向のナデ、底盤外縁はナデ～一部に削り押さえ感。内面は摩耗のため、調整不良。	
27.	土師器	塗	SD09		3.6	5.6	底部外縁は不定方向のナデ、側面～体部はタキ。外縁に煤が付着する。内面はハケメ。	
28.	土師器	器台	SX01		18.0	24.2	脚柱部外縁は横方向のハケメタキ。脚部は横方向のハケメ。内面は脚柱部がナデ。脚部は横方向のハケメで、底部は横ナデ。	
29.	土師器	器台	SH02		23.0	15.7	18.1	底部外縁～底盤部をとめる。体部外縁は横方向の平行タキ。内面は中心から放射状にタキ。
30.	土師器	高杯	SX01		29.3	8.6	底部の外縁は左斜め上、内面は横方向のハケメ。口縁部の底盤ならびに途中の屈曲部において沈緑色を呈する。端縁の上下には崩れ。	
31.	土師器	裏	SH02		16.9	4.0	体部外縁は左斜め上、内面はナデ。底盤部は外縁をナデ、内面は板ナデ。	
32.	土師器	裏	SH07		5.0		口縁部は凹絞り。脚柱部はタキ。内面はヨコナデ。	
33.	土師器	裏	SD08		3.9	3.5	底部外縁はナデ。側面は斜め上～左斜め上のハケメ。内面は板ナデ。	
34.	土師器	裏	SD06		3.4	3.8	底部外縁は凹絞り。脚柱部はタキ。内面はヨコナデ。	
35.	土師器	蓋	SD08		3.0		内・外面ともにナデ。	
36.	土師器	裏	SD08		2.3	4.1	内・外面ともにナデ。	
37.	土師器	裏	SH06		3.6	3.2	底部外縁はナデ。側面は斜め上～左斜め上のハケメ。内面は板ナデ。	
38.	土師器	朴	SH01		5.2	2.7	外縁はナデ。内面は斜め上～左斜め上のハケメ。	
39.	土師器	底盤	SH12		3.4	4.1	底部外縁は1方向へのナデ。側面～体部はヨコナデ。内面は摩耗のため、調整不良。	
40.	土師器	底盤	SH13		2.5	4.0	底部外縁はナデ。内面は中央を板ナデ。他はナデ。	
41.	土師器	底盤	SH14		3.0	4.7	底部外縁はナデ。側面～体部は摩耗により調整不良。内面は中央を板ナデ。	
42.	土師器	塗	SH06		2.3	5.6	内・外面ともに摩耗のため、調整不良。	
43.	土師器	甕	SD08		5.5		手縛部分は手縛タキ。体部内面はナデ。	
44.	土師器	裏	SH07		2.2	3.4	底部外縁はナデ。側面は横方向のハケメの後で細いハラミガキ。内面は板ナデ。	
45.	須恵器	杯蓋	SD08		4.9		外縁は天井部中央付近を凹絞り。周縁を削りヘラ削り。体部以下は口縁ナデ。内面は天井部～口縁部を削り。	
46.	須恵器	杯蓋	SD08		13.3	4.4	外縁は天井部中央付近を凹絞り。周縁を削りヘラ削り。体部以下は口縁ナデ。内面は天井部～口縁部を削り。	
47.	須恵器	杯蓋	SH06		14.4	4.2	外縁は天井部を削りヘラ削り。体部以下は口縁ナデ。口縁部外縁には右上がりにハケメ状の痕跡を有す。天井部の中央部に内面に円内タクシフ、体～口縁部は凹絞り。	
48.	須恵器	杯蓋	SH06		15.8	4.0	外縁は天井部を削りヘラ削り。体部以下は口縁ナデ。	
49.	須恵器	杯蓋	SH07		16.0	4.0	外縁は天井部を削りヘラ削り。体部以下は口縁ナデ。	
50.	須恵器	杯身	SH04		10.9	3.8	外縁底部はナデ。側面～体部は摩耗による調整不良。内面は底盤部を凹絞り。	
51.	須恵器	杯身	SH07		13.5	4.2	外縁底部はナデ。側面～体部はモロナデ。	
52.	須恵器	杯身	SH04		4.5	11.4	外縁底部はナデ。側面～体部はモロナデ。内面は底盤部を凹絞り。	
53.	須恵器	杯身	SH04		3.7		内・外面ともに、体～受け部を凹絞り。	

第2表 出土器物観察表(2)

社	種類	器種	出土遺構	口径	高さ	底径	調整および備考
54	須恵器	杯身	SH06	10.0	4.1		外蓋底部は左方への斜面へラ削り、ヘラ記号「ノ」あり。体～口縁部は回転ナデ。内面は底部中央に同心円スタンプ、体～口縁部は回転ナデ。
65	須恵器	杯身	SH06	12.0	4.1		外蓋底部は左方への斜面へラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は底部中央に一方角へのナデ、他は回転ナデ。
55	須恵器	杯身	SH06	13.0	4.6		外蓋底部は左方への斜面へラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は底部中央に不定ナデ、体～口縁部は比較的直線的な回転ナデ。
57	須恵器	杯身	SH07	12.0	5.1		外蓋底部は左方への斜面へラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。
58	須恵器	杯身	SH07	14.0	2.6		外蓋底部は左方への斜面へラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。
59	須恵器	杯身	SH08	14.2	4.1		外蓋底部の一部で回転ナラ削り底が遺存、体～口縁部は回転ナデ。内面は体～口縁部を回転ナデ。
60	須恵器	杯身	SH09	-	3.5		内・外面ともに回転ナデ。
61	須恵器	瓦瓶蓋	SH14	12.3	6.5		内・外面ともに回転ナデ。
62	須恵器	短縦板	SH06	7.8	9.1		外蓋底部は左方への斜面へラ削り、その周囲を強くへラ削り。その周囲を強くへラ削り。体～翼部外縁はカキメ。内面は底部周囲を回転ナデ。
63	須恵器	壺	SH06	-	3.1		フマとの周囲を回転判列。外縁は右回転のヘラ削り。内面は中央に一方角のナデ、他は回転ナデ。
64	須恵器	壺	SH06	18.0	33.7		口縁～縁部は内・外面とも回転ナデ。体～底部外縁は平行タタキ。縁部にはさらにカキメ。内面は中心内の円形である。
65	須恵器	壺	SH15	13.0	6.9		口縁～縁部は内・外面とも回転ナデ。翼部外縁は平行タタキの後カキメ。内面は同心円の内側で直線。
66	土師器	甕	SH13	16.0	3.3		内・外面とも、標準ナデ。
67	土師器	甕	SH08	-	4.8		甕部は標準ナデ。他は標準により調整不規。粘土の乾ぎ目微弱を認める。
68	土製品	埴輪	SH07	-	7.6		外縁は直角方向のハケマ、タガの上下に沿って貼り付け時のナデ。タガの裏面には指揮印がある。
69	須恵器	杯蓋	SX04	13.2	3.5		外縁の天井部は右回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は天井部中央に同心円スタンプシンド。一方角へのナデ、体～口縁部は回転ナデ。
70	須恵器	杯蓋	SX04	14.0	4.7		外縁の天井～縁部は右回転のヘラ削り、口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。
71	須恵器	杯蓋	SX04	15.5	4.0		外縁の天井部は右回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。
72	須恵器	壺	第1包含層	14.3	4.8		外縁の天井部と左回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。
73	須恵器	杯蓋	第1包含層	13.8	4.9		外縁の天井部は右回転のヘラ削り、口縁部は回転ナデ。
74	須恵器	杯蓋	第1包含層	14.0	4.9		外縁の天井部は右回転のヘラ削り、口縁部は回転ナデ。
75	須恵器	杯蓋	-	13.0	4.4		外縁部は天井部は回転ヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は天井～口縁部を回転ナデ。
76	須恵器	杯蓋	-	14.0	4.6		天井部外縁はハラ切りの後、右回転のヘラ削り。体～口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。
77	須恵器	杯蓋	第1包含層	14.0	4.1		外縁の天井部は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ。内面は回転ナデ、董ね崎きの痕跡がある。
78	須恵器	杯身	SX03	13.3	4.2		外縁の天井部は左回りの回転ヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は底部中央にナデ、他は回転ナデ。
79	須恵器	杯身	SX03	12.0	3.6		内・外面とも、体～口縁部を回転ナデ。
80	須恵器	杯身	SX03	11.1	4.8		外縁の天井部は右回転ヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。
81	須恵器	杯身	SX04	12.8	5.3		外縁の天井部は右回転ヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は天井～口縁部を回転ナデ。
82	須恵器	杯身	第1包含層	12.0	4.5		外縁の天井部は右回転のヘラ削り、口縁部は回転ナデ。内面は底部中央にナデ、体～口縁部は回転ナデ。
83	須恵器	杯身	第1包含層	14.8	4.8		外縁の天井部は右回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。
84	須恵器	杯身	第1包含層	13.1	5.4		天井部の外縁は右回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。
85	須恵器	杯身	第1包含層	13.2	4.8		須恵器は右回転ヘラ削り、その跡跡によるヘラ記号を施す。体～口縁部は回転ナデ。
86	須恵器	杯身	第1包含層	13.6	5.0		外縁部は右回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。
87	須恵器	杯身	第1包含層	13.6	4.8		外縁部は右回転ヘラ削り、口縁部は回転ナデ。内面は底部中央にナデ、体～口縁部は回転ナデ。
88	須恵器	杯身	含合層	12.1	3.8	8.0	外縁部は右回転のヘラ削り、口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。
89	須恵器	杯身	第1包含層	13.6	4.7		外縁部は右回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は回転ナデ。
90	須恵器	杯身	第1包含層	12.0	4.3		外縁部は右回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。
91	須恵器	杯身	第1包含層	14.2	3.6		外縁部は右回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。
92	須恵器	杯身	第1包含層	12.6	4.9		外縁部は右回転のヘラ削り、体～口縁部は回転ナデ。内面は底部中央に一方角のナデ、他は回転ナデ。
93	須恵器	壺	SX04	13.5	2.7		内・外面ともも体～口縁部にかけて回転ナデ。
94	須恵器	短縦板	SX03	8.7	5.0		口縁部と内縁とも回転ナデ。矢絣部分の外縁では、体部への貼り付けに伴うナデ。
95	須恵器	小型壺	第1包含層	8.0	10.9		外縁部は底部中央に一方角のナデ、他は回転ナデ。
96	須恵器	高杯	第2包含層	7.1	10.6		底部内部は不定方向のナデ。脚部～縁部の外縁は回転ナデ。
97	須恵器	壺	SX03	25.8	9.0		口縁～縁部は回転ナデ。底盤外縁は平行タタキの後、粗いカキメ。内面は同心円の凸出部。須恵器の内面には「ノ」のヘラ記号あり。
98	土師器	壺	第1包含層	-	5.8		全体にチクチクで形成され、指揮する痕跡が顕著。器面は剥落し、細部の調整は不明確。
99	土師器	壺	第1包含層	-	3.8		手ツヅキで形成した後、面取り。
100	土師器	高杯	SP116	11.1	11.2		三面の底盤の接觸部分を接觸状に成形、底部は内・外面ともに横ナデ。柱状部外縁は不定方向のナデ。内面は指揮印。
101	土師器	高杯	-	8.0	10.7		外縁部の調整は不規則、脚部の内面中央に横ナデ。縁部にかけてナデ。
102	土師器	壺	SP139	14.5	2.8		外縁部の横～縁部を横ナデ。内面は平行タタキ。内面はナデ。
103	瓦器	壺	SE01	14.0	4.6	3.8	外縁部は右回転のヘラ削り、体～底盤部は回転ナデ。内面は口縁部付近を回転ナデ。内面に横文、底盤に溝文、底盤には平行線。
104	瓦器	碗	SE01	14.4	4.2	6.3	口縁部の近は外ともに回転ナデ。体～底盤部の外縁は指揮印の後に細いナデ。内面は口縁部付近を回転ナデ。内面に横文、底盤に溝文、底盤には平行線。

第3表 出土土器観察表(3)

No.	種別	器種	出土遺物	口径	器高	底径	調整および備考
105	瓦器	碗	SE01	14.8	4.6	3.7	外面は口縁部付近を回転ナデ。体～底部は指押さえ。内面は口縁部付近を回転ナデ、底部中央不定方向のナデ。内面に横文、体部に溝文、底部には平行線。
106	瓦器	碗	SE01	14.5	4.4	4.4	外縁は口縁部付近を回転ナデ。体～底部は指押さえ。内面は口縁部端部のみ回転ナデ。内面に横文、体部に溝文、底部には平行線。
107	瓦器	碗	SE01	14.7	4.6	4.9	外縁は口縁部付近を回転ナデ。体～底部は指押さえ。内面は口縁部端部のみ回転ナデ。内面に横文、体部に溝文、底部には平行線。
108	瓦器	碗	SE01	14.3	4.5	3.2	外縁は口縁部付近を回転ナデ。内面に横文、体部に溝文、底部には平行線。
109	瓦器	碗	SE01	14.3	4.4	4.4	外縁は口縁部付近を回転ナデ。内面に横文、体部に溝文、底部には平行線。
110	瓦器	碗	SE01	2.7	4.5		外縁は底部は指押さえ。内面に横文を認めるが、全容は不明。
111	瓦器	碗	SE01	15.3	4.3	4.9	外縁は口縁部付近を回転ナデ。体～底部は指押さえ後、組い回転ナデ。内面は口縁部端部のみ回転ナデ。内面に横文、体部に溝文、底部には平行線。
112	瓦器	碗	SD02		4.2	6.0	器底の剥離が激しく、指押さえ不明確。内面に横文を認める。
113	瓦器	小皿	SE01	8.5	1.8		底部外縁は、指押さえの後、組いナデ。口縁部内外を回転ナデ。内面には渋巻きの横文。
114	瓦器	小皿	SE01	8.7	2.0		底部外縁は、指押さえの後、組いナデ。口縁部内外を回転ナデ。底部内面には1方角ナデ。
115	土器器	小皿	SE01	8.9	1.8	4.3	底部外縁は組いナデ。口縁部内外を回転ナデ。底部内面には1方角ナデ。
116	土器器	小皿	SE01	8.5	1.5	4.7	底部外縁は組いナデ。口縁部内外を1方角ナデ。底部内面には1方角ナデ。
117	土器器	小皿	SE01	8.8	1.7		底部外縁は糸切り痕跡。口縁部内外を回転ナデ。
118	土器器	小皿	SP09	9.8	1.2	7.6	内・外面とも、口縁～底部を指押さえ。指押さえ工具による押さえ。内面に横文。
119	瓦器土器	鍋	SP07	17.8	8.4		口縁部は指押さえの後、組いナデ。口縁部内外を回転ナデ。底部内面には1方角ナデ。
120	瓦器	鉢	SP09	17.8	3.2		口縁部は回転ナデ。内面から外側にも横方向のヘリガギ。
121	土器器	鍋	SP00				指押さえは全体で手ヅクによる横壓。本体の内面部分は指押さえ。
122	瓦器	鉢	第2包合層	1.8	6.0		外縁は逆台状り付け棒のナデが遺存。内面に横文。底部には平行線。
123	須恵器	鏡	SK284	14.0	4.6		内・外面とも、口縁～体部は指押さえ。
124	土器器	便?	SP113		4.3		内外ともロープ～横圧を複数。
125	複種階層器	鏡	第2包合層	1.7	5.6		底型外縁は中心キララ削り、その外を回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。
126	複種階層器	鏡	第2包合層	1.7	5.8		内・外面ともに回転ナデ調整。
127	須恵器	鏡	第1包合層	8.7	3.5		漆の一例に研磨。底。ヘラ状工具で各部を調整し、接合時にナデ。
128	須恵器	墨書き土器	SH06		0.9		外面は1ラテ削りで、墨痕の一部が遺存。内面に横文。底部には平行線。
129	須恵器	底部	第2包合層				内・外面ともに回転ナデ調整。内面には漆の付着。
130	土器器	甕	SX02		35.8		外縁は口縁～底部を指押さえ。体部～底部は横方向のハケメ。外縁の一例には煤が付着。内面は口縁～底部を指押さえ。体部以下を横方向のハケメ。内面に体～底部でハケメ痕が遺存。
131	土器器	甕	SX02	19.6	36.5		達成時と客土から発見。深位置不明のため、写真のみ掲載。
132	須恵器	杯身	壁乱段				写真のみの指記。複数のため、図できません。器形は不明。
133	土器器	不明	SH04				写真のみの指記。不明。
134	須恵器	檢?	SS02				写真のみの指記。化度ですか？
135	須恵器	杯盤	SH03				写真のみの指記。天井部のみ遺存のため、化度できず。
136	須恵器	杯蓋	SH03				写真のみの指記。天井部のみ遺存のため、化度できず。

第4表 検出清一覧表

遺構名	検出長	最大幅	断面形	方向	出土遺物・備考
SD01	15.8	0.85	U字形	→南	細片(土師器・須恵器)
SD02	2.5	0.28	V字形	→東	瓦器陶(112)など。
SD03	7.8	0.7	逆台形	→東	細片(土師器・須恵器)
SD04	7.6	0.72	逆台形	→南	細片(土師器・須恵器)
SD05	1.9	0.4	U字形	→南	
SD06	4.8	0.85	V字形	→南西	第1・第2遺構両方向の該当遺物を含む。
SD07	3.1	0.2	半円形	→南東	
SD08	13.5	1.2	U字形	→南西	土師器・須恵器(33～36, 43, 45～46)
SD09	25.5	1.2	U字形	→南西	古墳時代初期の土師器が一括出土
SD10	6.3	0.3	V字形	→南西	

※ 検出長・最大幅の単位はm。

## 第5章 まとめ

高畠町遺跡は、平成7年度に兵庫県教育委員会が実施した、震災復興事業に伴う調査を契機として明らかになった。埋蔵文化財の存在はおろか、過去の地形を想像することさえ困難な市街地。地下で静かに眠り続けていた遺跡は、地震とともに姿を現わした。調査では遺跡の性格を、「集落跡」と位置付ける遺構が検出され、性格の一端を把握することができた。

第1遺構面は、弥生時代末～古墳時代初頭・古墳時代後期の遺構が見られる。前者は3棟の円形竪穴住居のほか、大量の土器が出土した溝SD09が注目される。遺物は溝底面で検出され、良好な遺存状況を保つものが多い。堆積の様子から遠距離より流入したとはいはず、原位置もしくは至近からの投棄が形成したと考える。出土遺物の多くを占める甕は明瞭な平底と尖った下部をなし、第V様式に通じる形態を持つ。外面のラセン状タタキ調整や分割成形といった手法も特徴的で、同様の手法は共伴する鉢や壺にも認められる。形態変化の明瞭な器形はほとんどなく、細かい時期比定には限界もあるが、弥生時代の終末期から古墳時代初頭にかけての所産と考えられる。周辺で検出された住居址も、ほぼ同時期の遺物が出土しており、集落内における溝の性格が注目される。

古墳時代後期の遺構としては、方形の竪穴住居を12棟検出した。出土した遺物は古墳時代後期の須恵器が中心で、近接した時期の住居が数多く切り合う。各住居址の遺存状態も悪く、第2包含層やSX03・04を形成する洪水砂によって流出・亡失したものも多い。住居の頻繁な建て替えや集落の発展を考える上で興味深い状況といえる。出土遺物の中で注目されるものには、SH06から出土した子持勾玉がある。形態は退化が進み、材質も悪い。床面直上の検出状況に特別な点は見られなかったが、住居址から出土した例は少ないだけに、性格を知る上で手がかりを含んでいるのかもしれない。共伴する須恵器から、6世紀後半と考えられる。

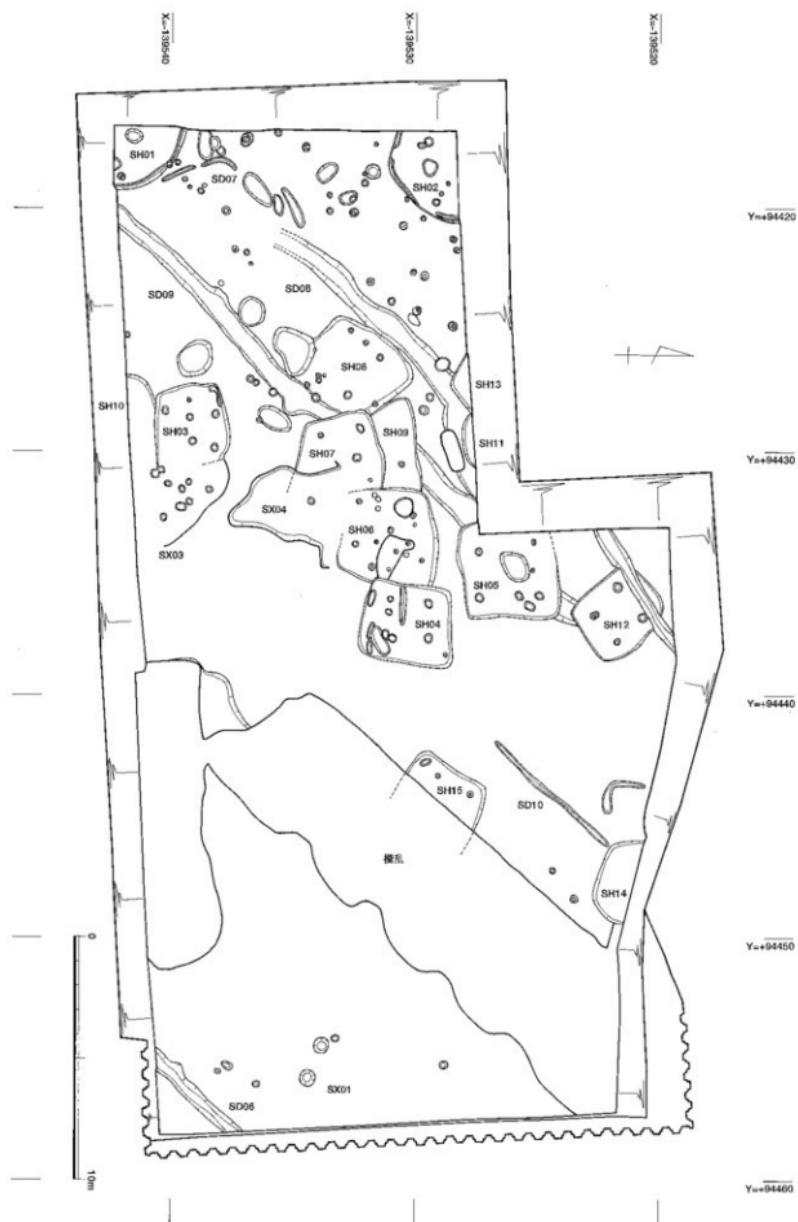
第2遺構面は、中世の遺構を中心となる。ほぼ南北を指向する溝SD01よりも西側に建物・井戸などが集中する一方、東側には顯著な遺構がない。SD01は集落の境界を明示する機能を果たしたと考えられる。4棟検出した掘立柱建物はさらに東側へ拡張をみせるが、中世の掘立柱建物は調査区から西150mの地点でも數棟検出され、集落が大きく展開する可能性を示唆している。

出土遺物が少ないために時期決定の困難な遺構が多いなか、建物群の東側にある井戸（SE01）からは、土師皿・瓦器碗などが完形に近い状態で出土した。瓦器碗は口縁部の形態から和泉型と考えられ、出土した土師皿とも、12世紀中ごろの年代感を示す。

この調査と前後して、周辺で行われた調査でも、遺跡の時期や範囲を知る成果が得られつつある。上記の3時期は高畠町遺跡におけるピークを示し、また堆積状況からは自然の驚異にさらされつつ断絶を繰り返した様子も窺える。しかし、いくつかの遺構や遺物はピークの谷間に営まれ、今回の調査で遺跡の動向を完全に把握したとは言い難い。実態を明らかにするために必要な課題は少なくない。

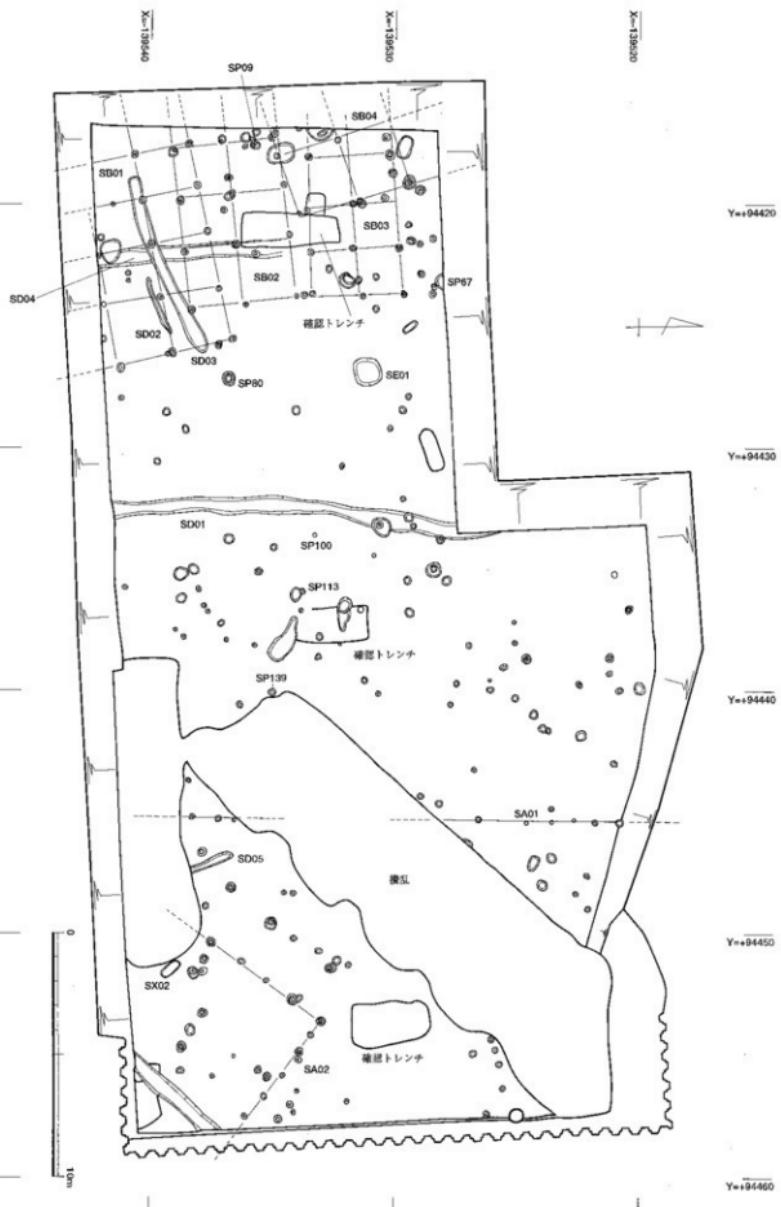
西宮市の市街部は、猪名野平野の西部を占める広大な冲積平野である。高畠町遺跡をはじめとする遺跡の動向は当地の歴史を考える上で大きな鍵を握っており、今後の調査成果の蓄積が不可欠である。今回の調査成果は、高畠町遺跡の実態に迫る第一歩である。集落の規模や性格、周辺の遺跡との関係など、本報告では紙幅の関係から詳細な検討を加えることはできなかったが、周辺で行われる調査成果も加えた再評価を期して結びとしたい。

# 図 版



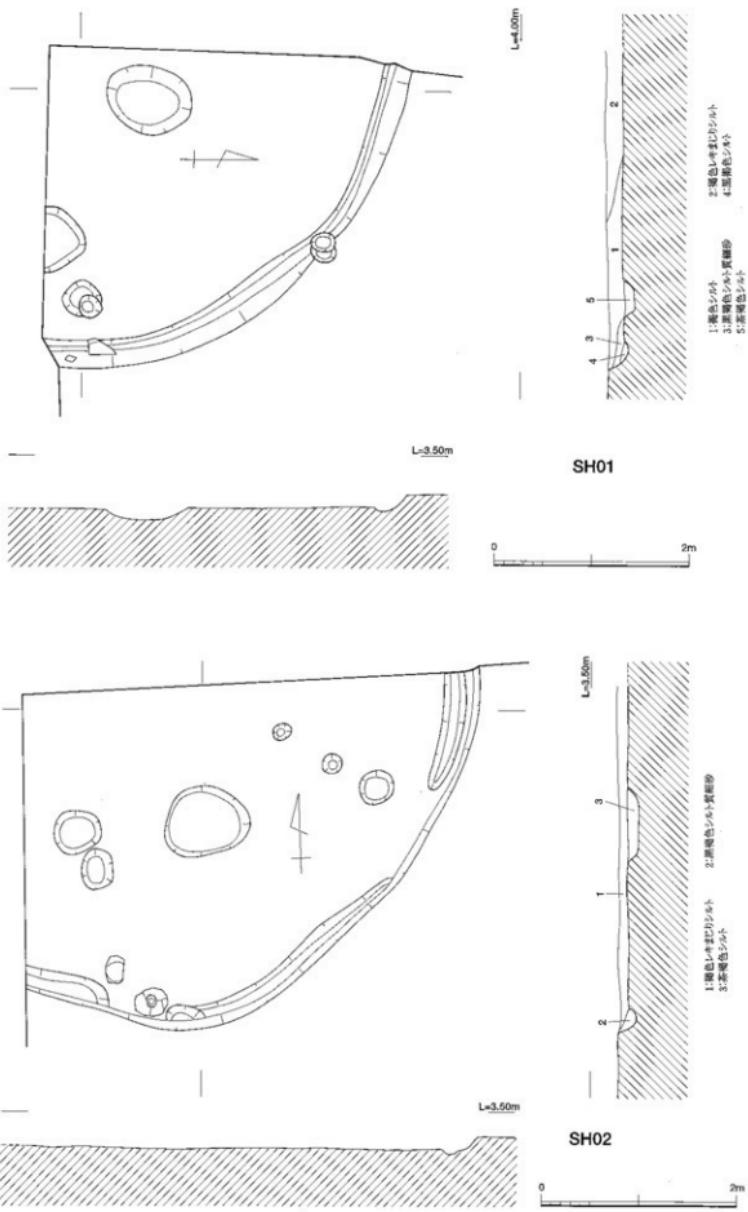
第1道構面全体図

## 図版 2



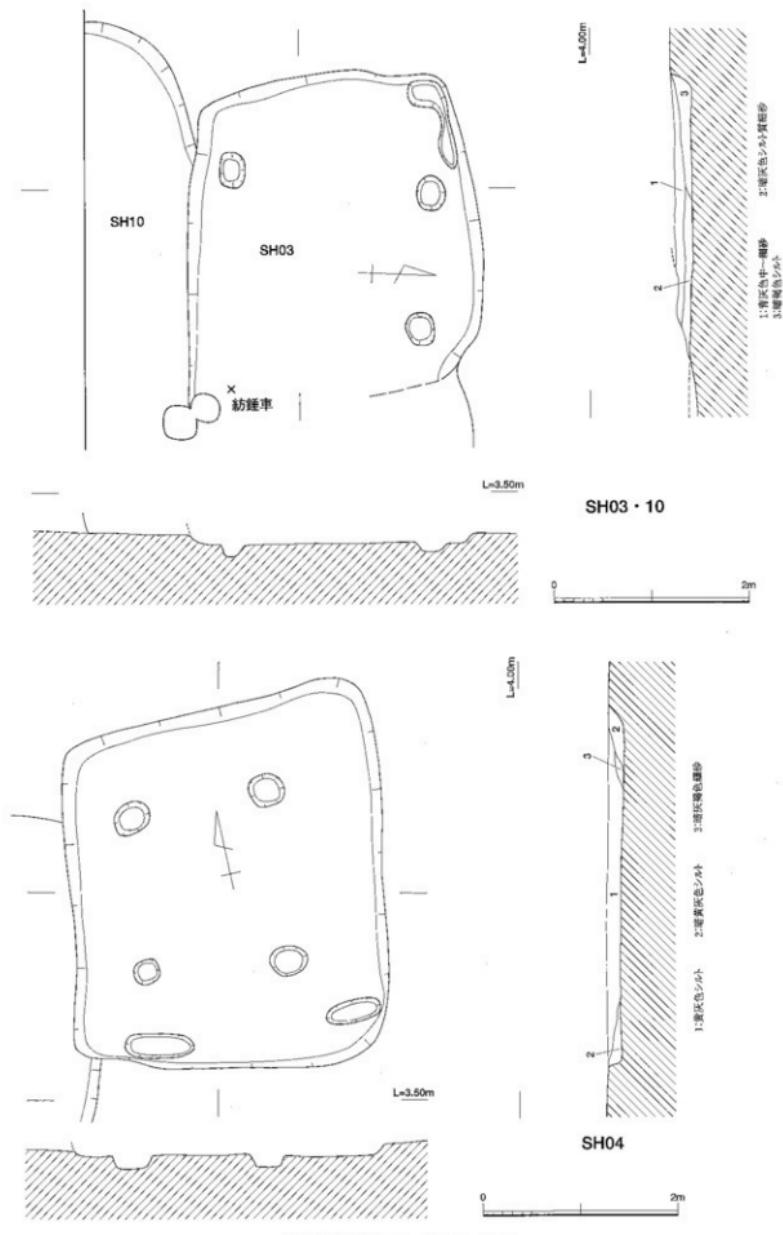
第2 遺構面全体図

図版 3



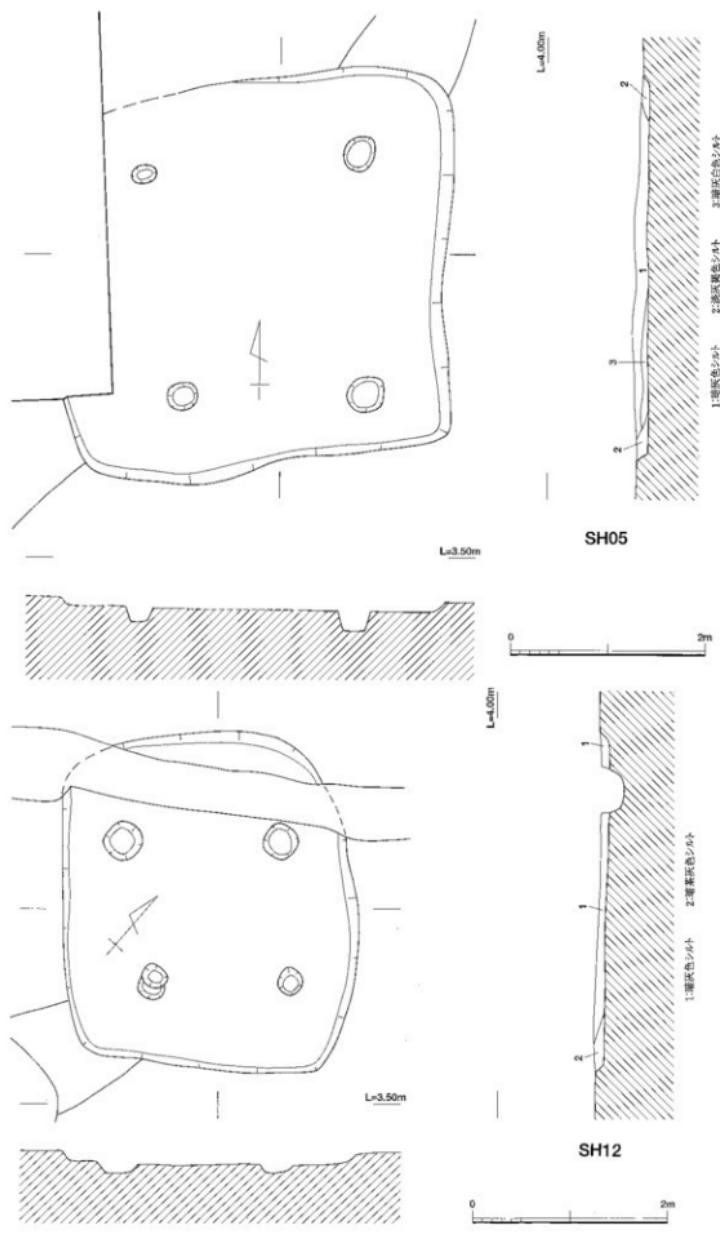
遺構平面図 SH01・SH02

図版 4



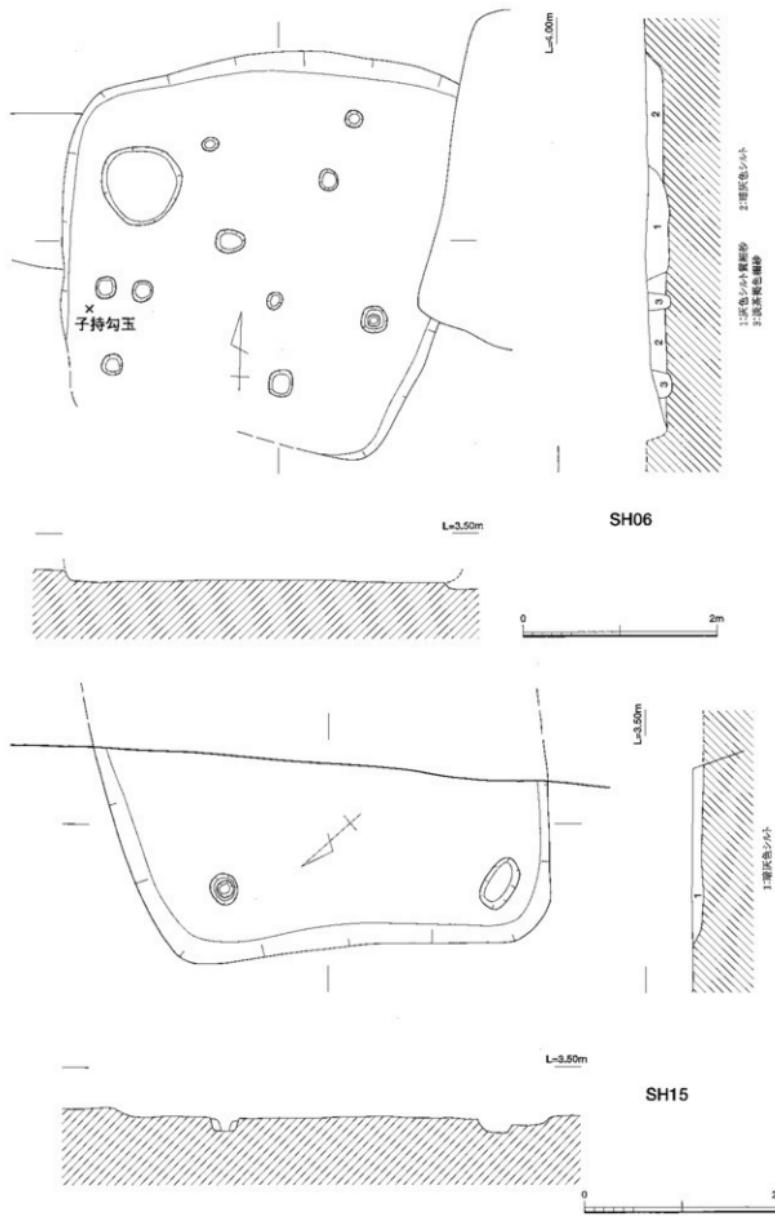
遺構平面図 SH03 · SH04 · SH10

図版 5

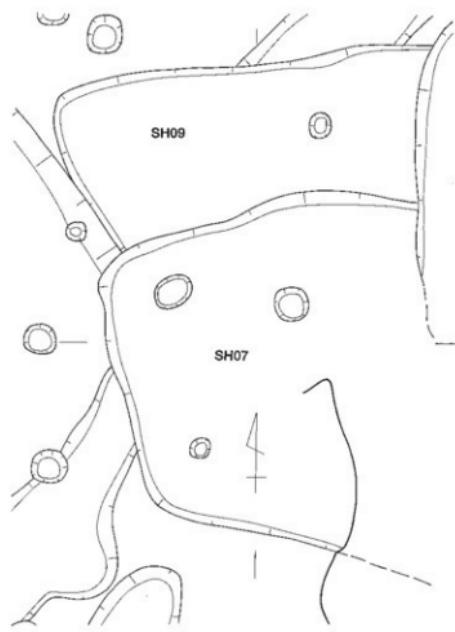


造構平面図 SH05・SH12

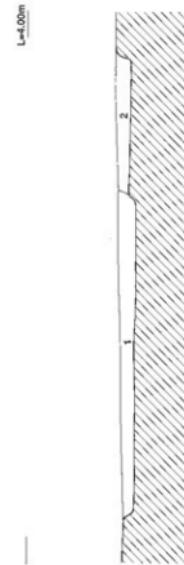
## 図版 6



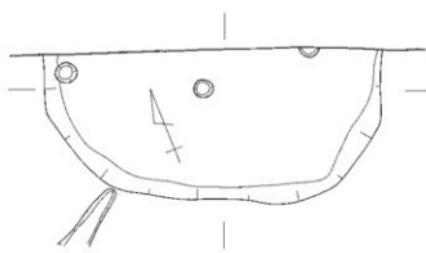
図版 7



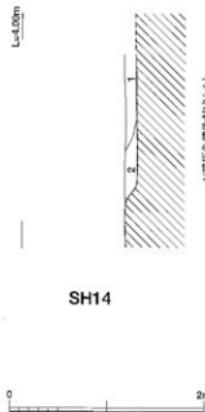
SH07・09



1: 淡黄色シルト  
2: 深灰色シルト



SH14

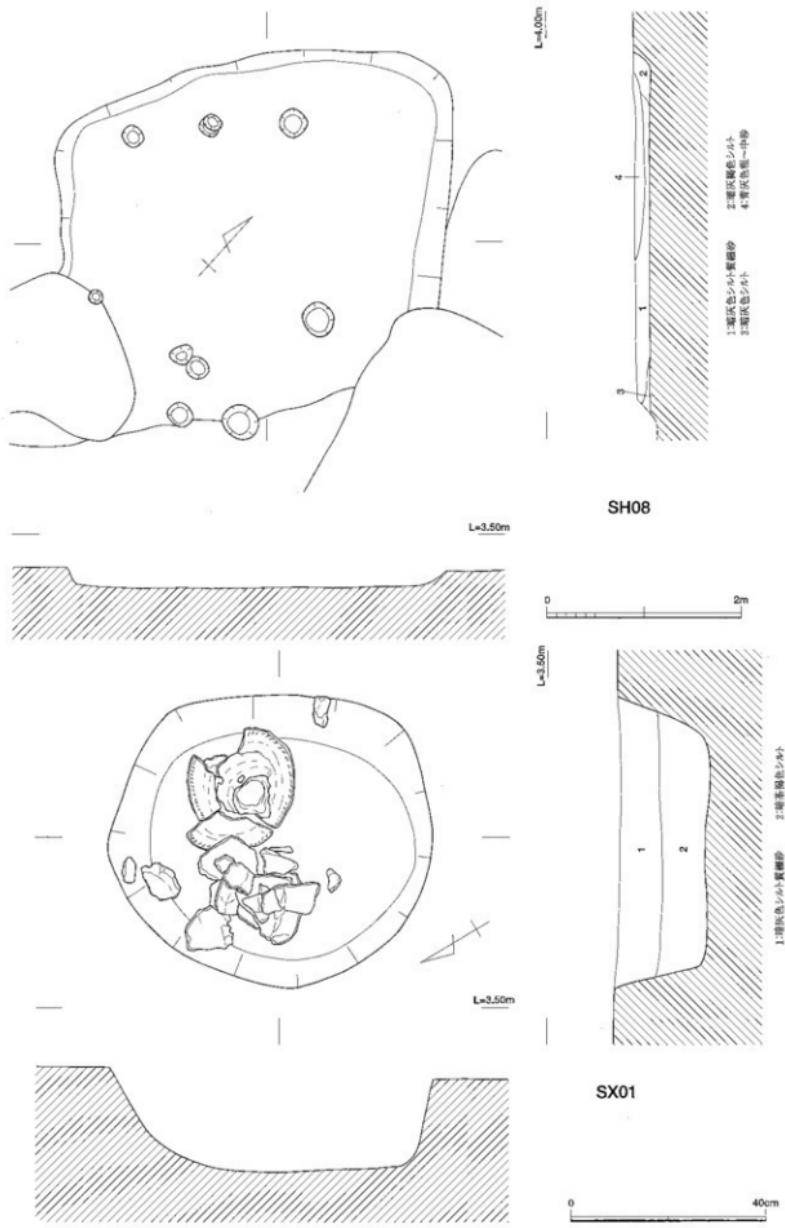


1: 淡黄色シルト  
2: 深灰色シルト

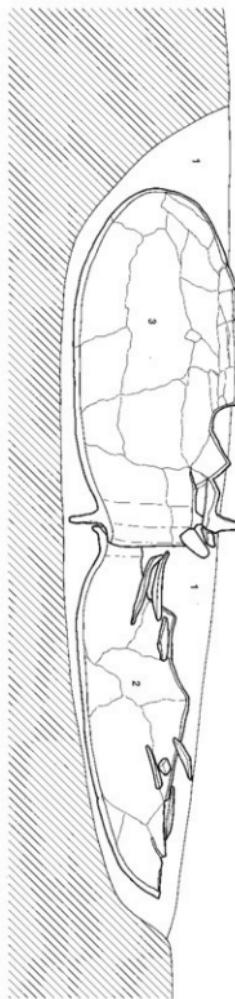


造構平面図 SH07・SH09・SH14

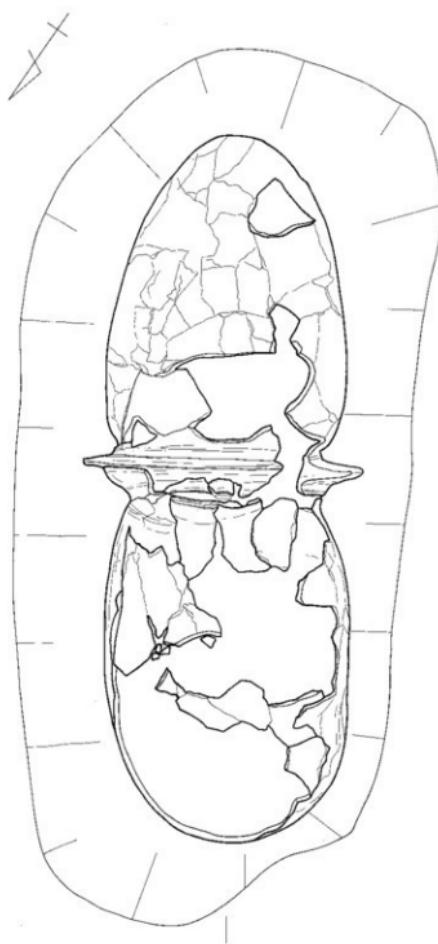
図版 8



遺構平面図 SH08・SX01



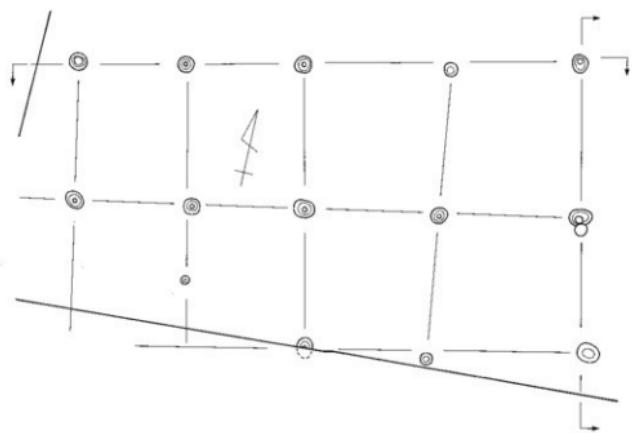
1.薄青灰色地  
2.褐色  
3.褐色  
4.白色  
5.褐色  
6.褐色



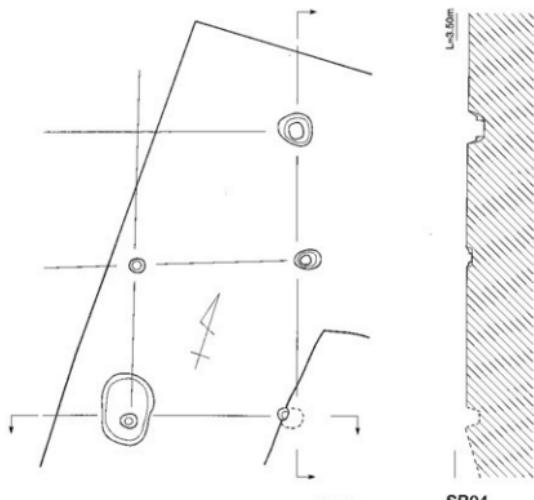
SX02

造構平面図 SX02

## 図版10



SB01

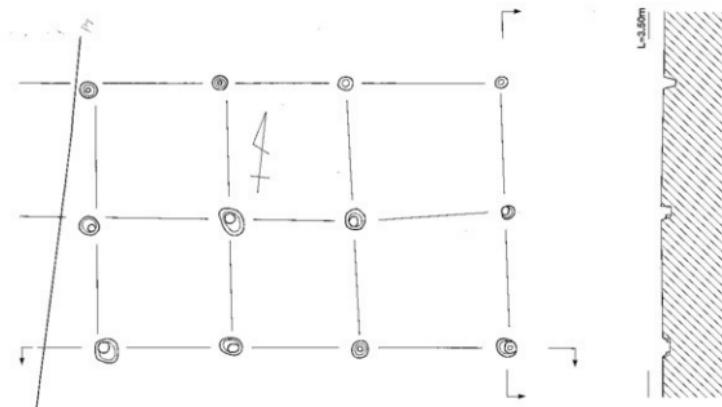


SB04

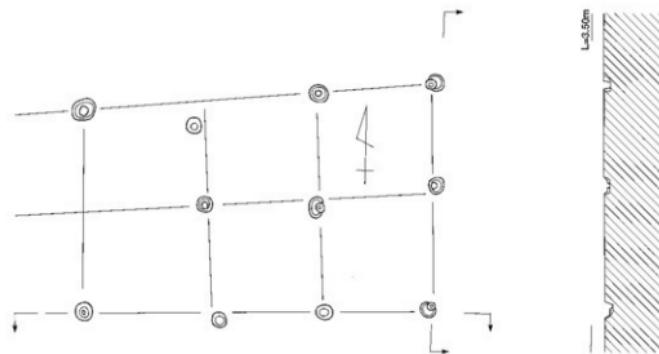
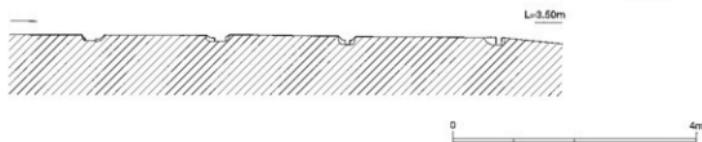


造構平面図 SB01・SB04

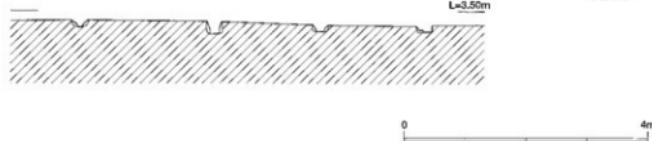
図版11



SB02

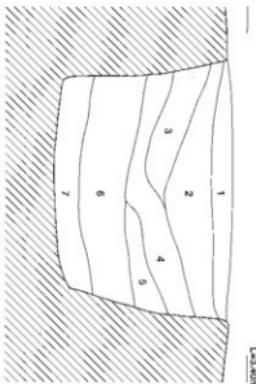


SB03



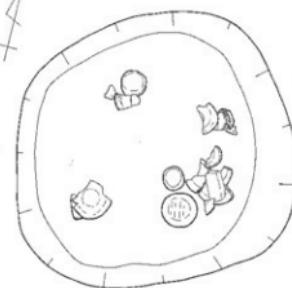
造構平面図 SB02・SB03

## 図版12



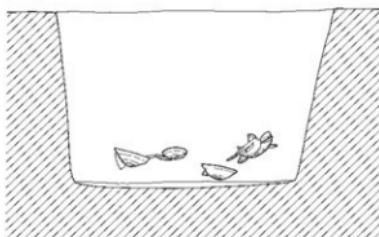
L=3.60m

- 1.黒褐色土砂
- 2.黒褐色土砂
- 3.黒褐色土砂
- 4.黒褐色土砂
- 5.黒褐色土砂
- 6.黒褐色土砂
- 7.黒褐色土砂



SE01

L=2.40m

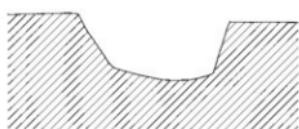


L=2.50m

L=2.20m



- 1.黒褐色シート
- 2.黒褐色シート
- 3.黒褐色シート
- 4.黒褐色シート

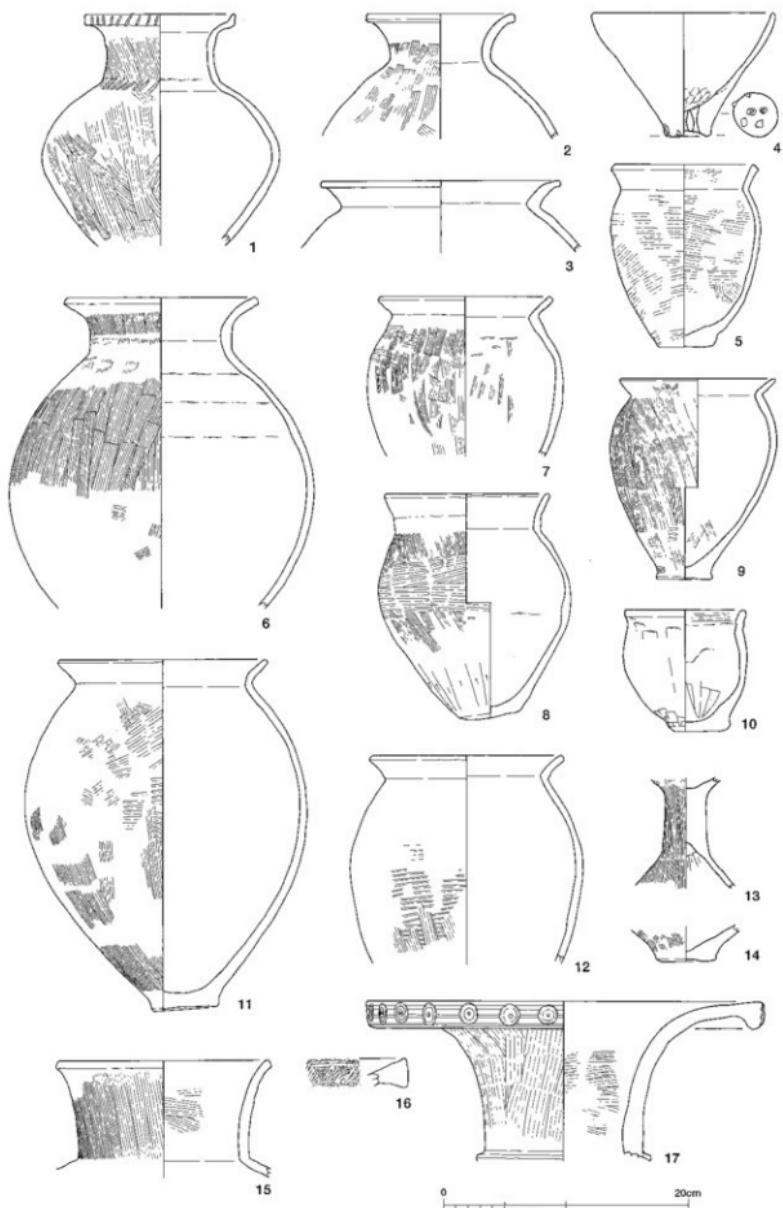


SP139



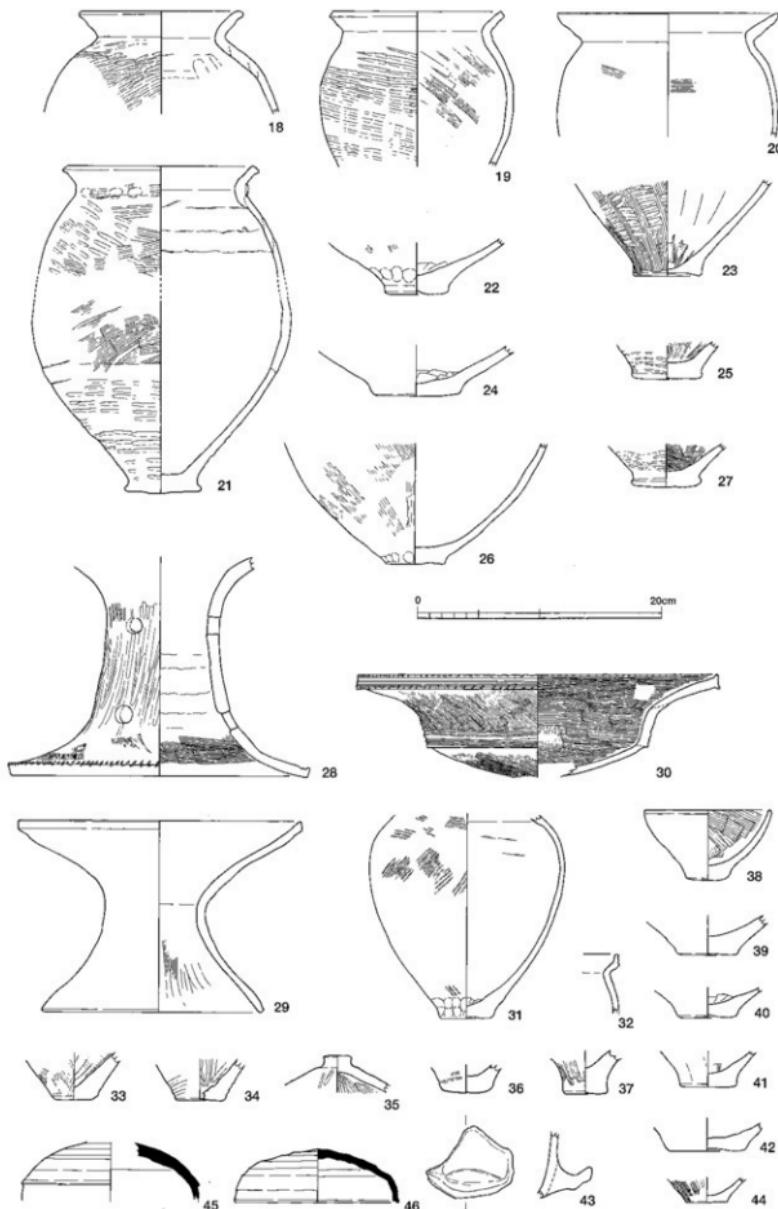
遺構平面図 SE01・SP139

図版13



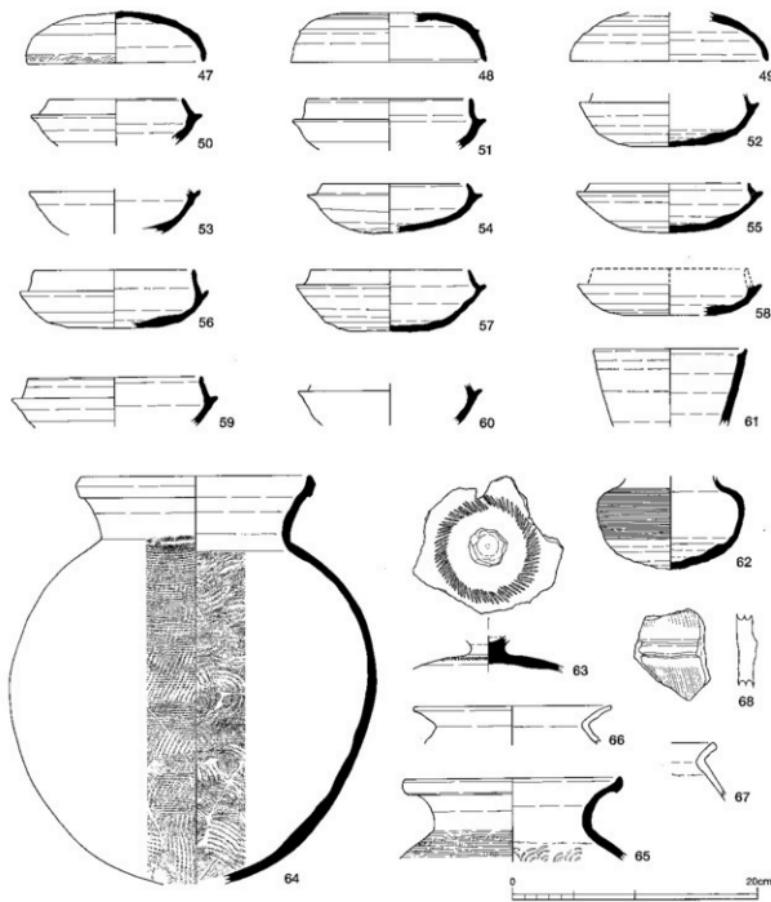
出土遺物実測図(4)

図版14



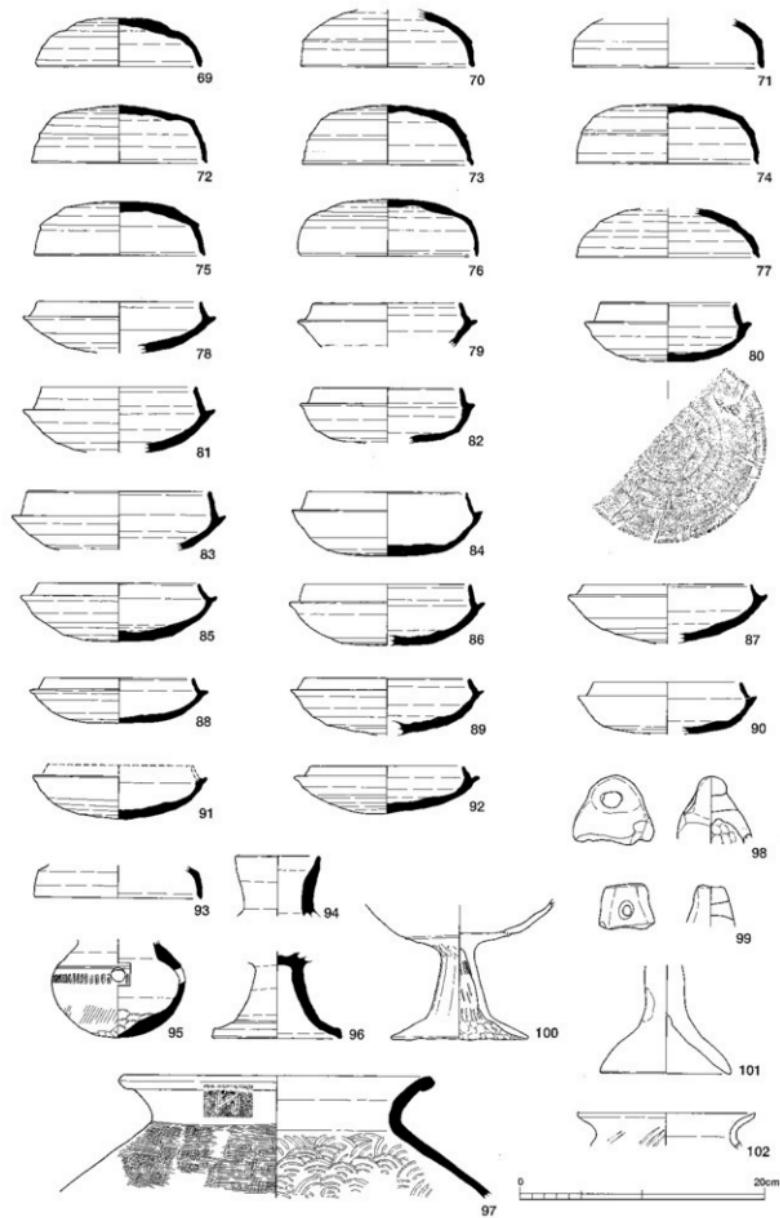
出土遺物実測図(5)

図版15

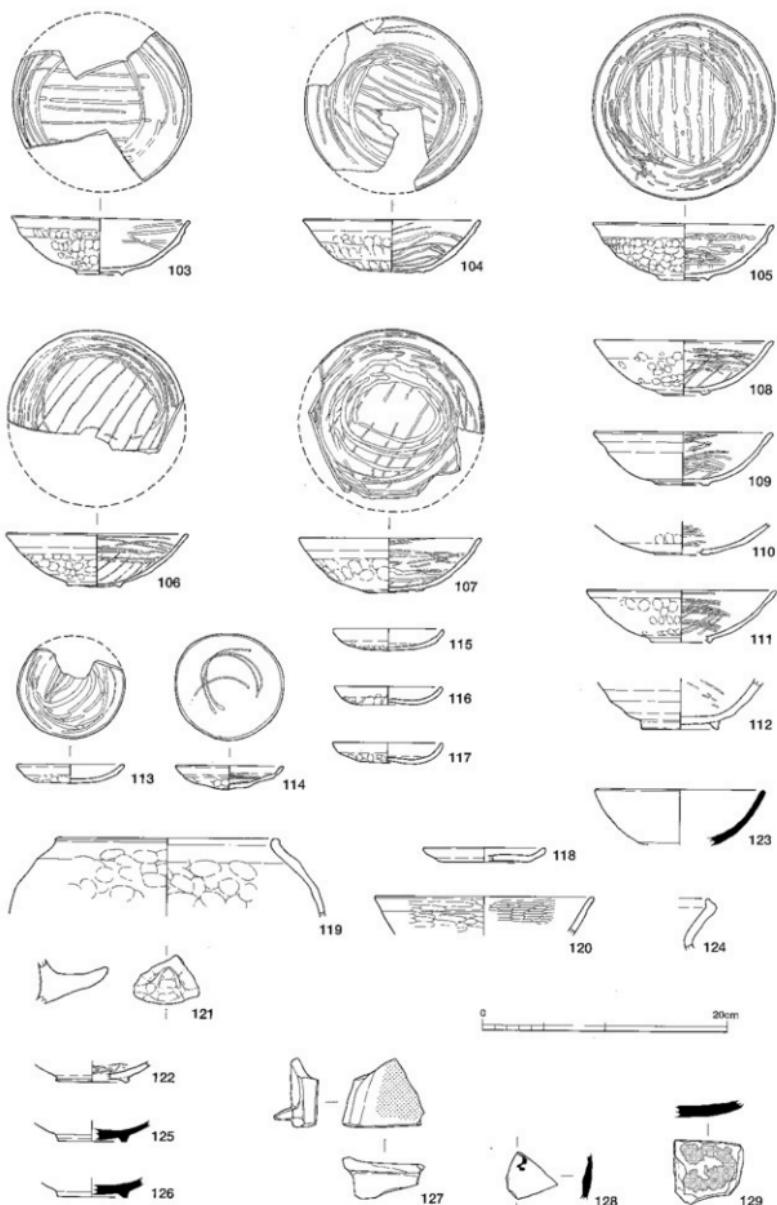


出土遺物実測図(6)

# 図版16



出土遺物実測図 (7)



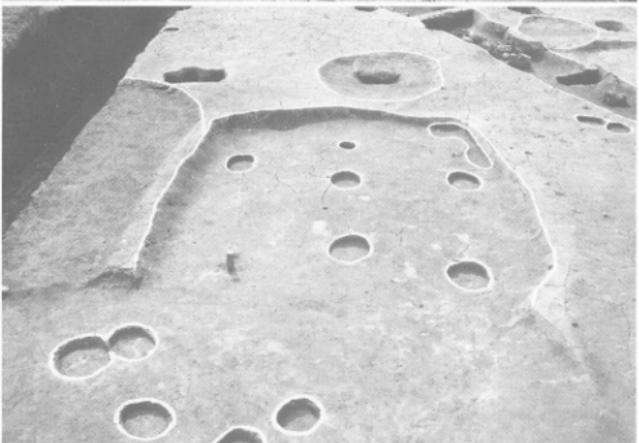
出土遺物実測図(8)

# 写真図版

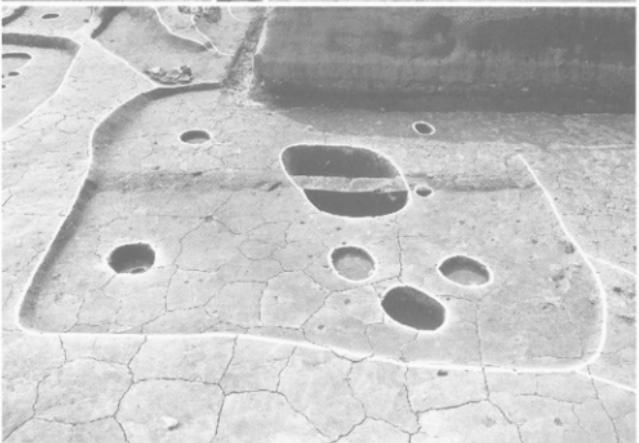
第1造構面西部全景  
(溝・竪穴住居群)



竪穴住居 SH03・10



竪穴住居 SH05



## 写真図版 2

竪穴住居 SH04・05・06



子持勾玉出土状況  
(SH06床面)



竪穴住居 SH12



竪穴住居 SH14



竪穴住居 SH15

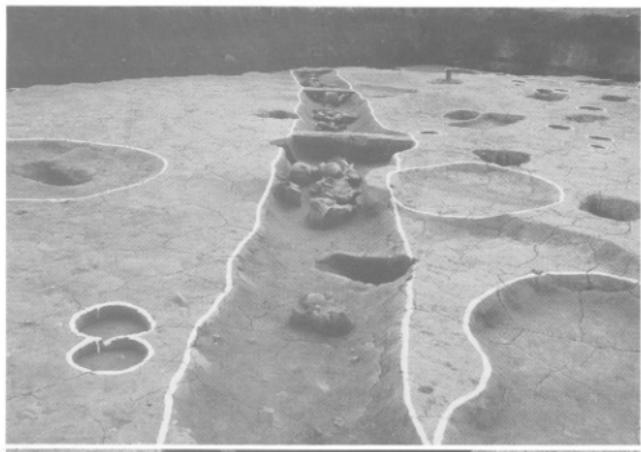


作業風景

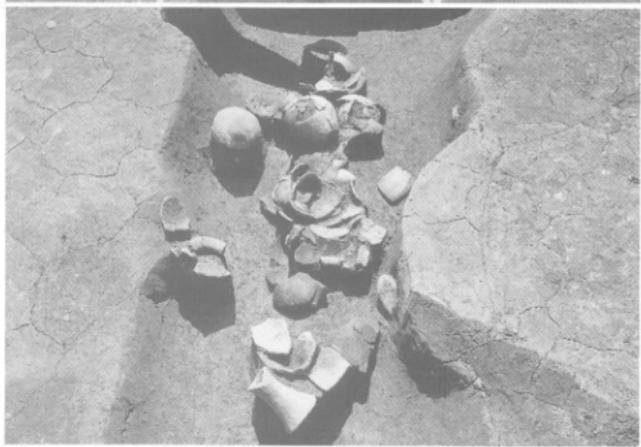


## 写真図版 4

溝 SD09  
(全景北西から)



溝 SD09  
(遺物出土状況)



溝 SD09  
(遺物出土状況)



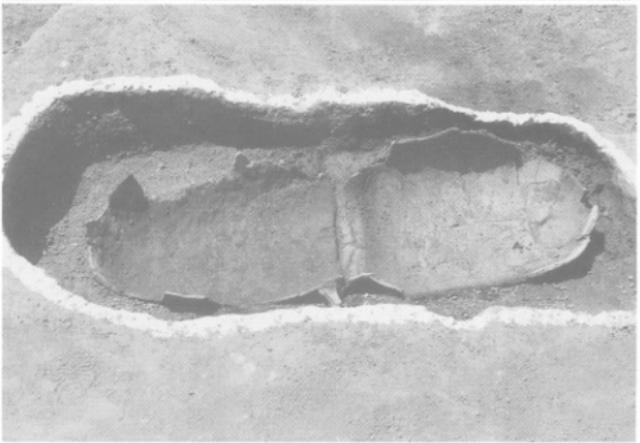
土坑 SX01



合口甕棺墓 SX02  
(検出状況)



合口甕棺墓 SX02  
(完掘状況)

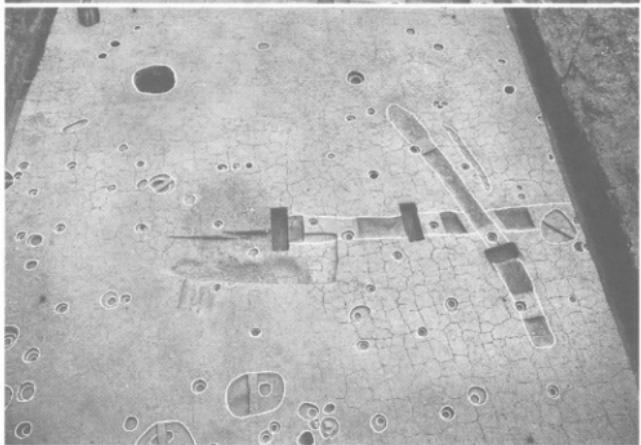


## 写真図版 6

第2 遺構面全景



掘立柱建物 SB01～SB03



井戸 SE01





1



15



2



5



6



8

写真図版 8





17



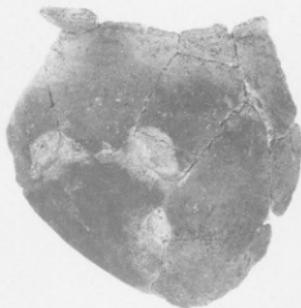
3



10



12



7



26



30



23

# 写真図版10



87



89



110



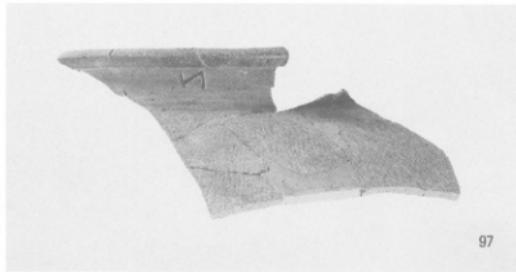
92



95



64



97



28



29



38



4



130



131

## 写真図版12



132



47



76



72



52



54



57



80



81



84



85



88



113



114



116



117



103



104



105



106

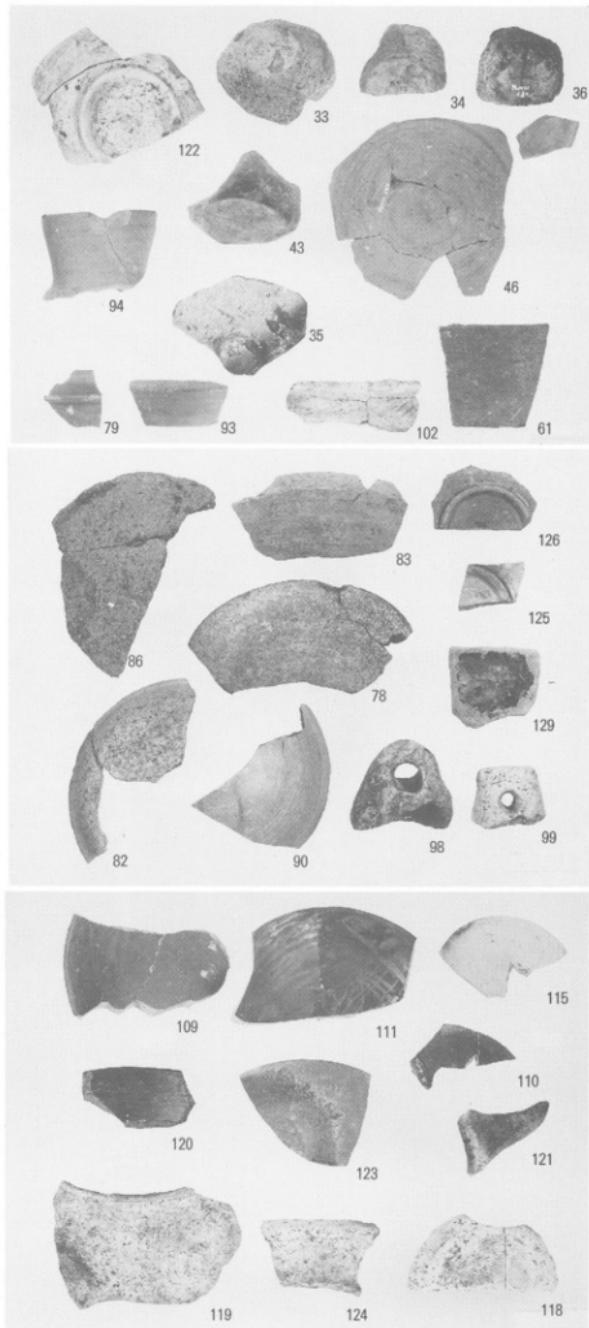


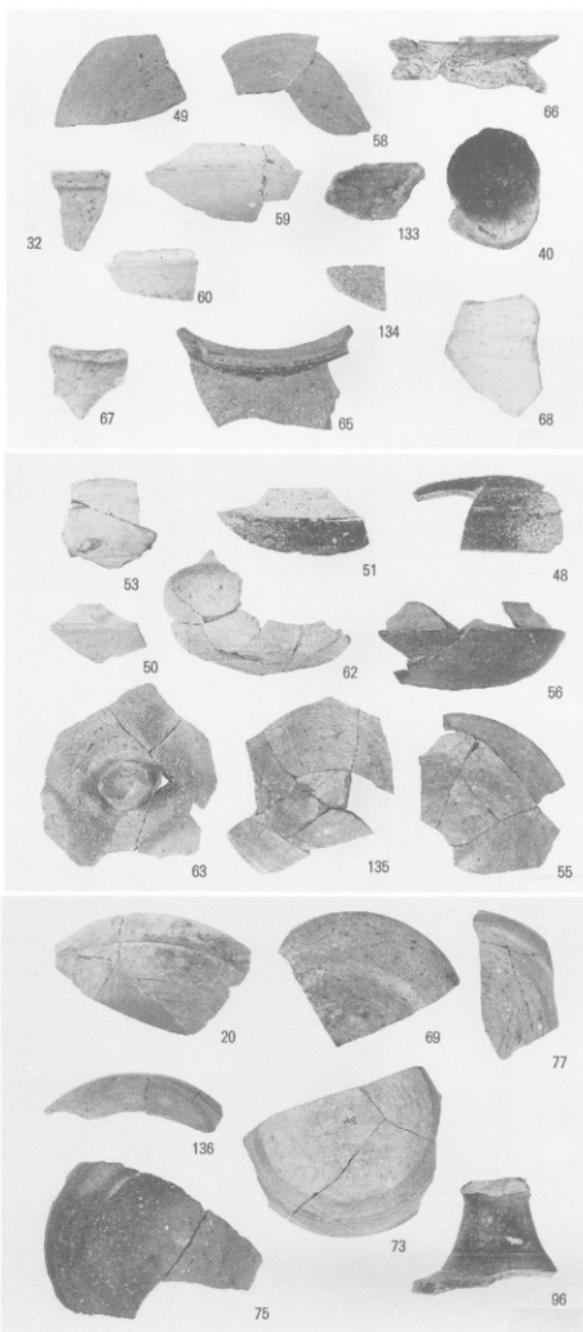
108

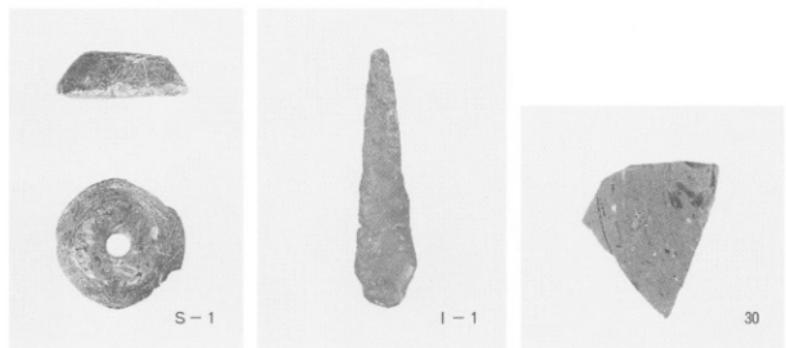


107

# 写真図版14







報告書抄録

ふりがな	たかはたちょう いせき							
書名	高畠町遺跡 II							
副書名	西宮待機宿舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第182冊							
編著者名	柏原 正民							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032	神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL. 078-531-7011						
発行年月日	西暦1999年(平成11年) 3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
たかはたちょう 高畠町	ひょうごにしのみや 兵庫県西宮市 たかはたちょう 畠町20-13	28204	9600101	34度 44分 17秒	135度 21分 52秒	確認調査 19970521 全面調査 19970708 ~ 19970909	24m <sup>2</sup> 768m <sup>2</sup>	西宮待機宿舎新築 工事に伴う 事前調査
			9600141					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高畠町	集落跡	古墳時代 初頭	竪穴住居・溝・土坑	土器				
		古墳時代 中期	竪穴住居・溝・土坑	土器・石製品	住居址床面から、子持勾玉 が出土			
		中世	掘立柱建物・井戸・溝 ・土坑	土器・鐵器				

---

兵庫県文化財調査報告 第182冊

## 高畠町遺跡（II）

—西宮待機宿舎新築工事に伴う発掘調査報告書—

平成11年3月30日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 大神印刷株式会社

〒650-0046 神戸市中央区港島中町2丁目2番1-5

---